だおがたり

だおくん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはだおくんの、とんでもない仕事のあとづけ日記……。

目次

だおがたり　1―1「脱・ニート！」　1
だおがたり　1―2「実力と難易度」　5
だおがたり　1―3「だお竜人　あらわる」　10
だおがたり　1―4「後輩が来た理由」　14
だおがたり　1―5「後輩はチーター」　17
だおがたり　1―6「有能な後輩（先輩越え）」　20
だおがたり　1―7「グレー企業？」　23
だおがたり　1―8「ブラックならぬダーク企業」　27
だおがたり　1―9「だお竜人の賭け」　31
だおがたり　1―10「因縁の戦い」　34
だおがたり　1―11「もう一回だけ」　38
だおがたり　1―12「怒りのシャープマーク」　42
だおがたり　1―FINAL「い

ざ魔王討伐！」――――――47
だおがたり　2―1　「人生詰む詰む？」――――――52
だおがたり　2―2　「ゆうぼう＆くろすけ」――――――56
だおがたり　2―3　「ドラゴン大発生中」――――――60
だおがたり　2―4　「竜なのかロボットなのか」――――――64
だおがたり　2―5　「勧誘失敗」68
だおがたり　2―6　「使えるものはなんだって」――――――71
だおがたり　2―7　「ここにはいない敵ども」――――――75
だおがたり　2―8　「1歩先の世界に」――――――79
だおがたり　2―9　「戦うしか能がない族」――――――83
だおがたり　2―10　「同族狩り」――――――88
だおがたり　2―11　「竜を束ねる暗黒」――――――93
だおがたり　2―FINAL　「真紅のシャープマーク」――――――98
だおがたり　3―1　「否定される

努力」――――――――――――――――103
だおがたり　3―2　「苦悩の竜人」――――――――――――――――107
だおがたり　3―3　「暗黒ver.2.0」――――――――――――――――111
だおがたり　3―4　「弱さに打ち勝つ時」――――――――――――――――115
だおがたり　3―5　「己を高める理由」――――――――――――――――120

だおがたり　1―1「脱・ニート！」

「ふぁ～あ…。もう朝か、早いなぁ。」朝7時半。眠そうに階段を降りる俺。

俺はだおくん。みんなからはだおと呼ばれている。

最近は何も面白いことがない。テレビを見ても大抵同じようなことばっかり放送してるし、ＤａｏＴｕｂｅだって最新動画が全然来ない。

強いてあると言うならば、いつもポストから取り出す新聞の４コママンガくらいだ。

ぼんやりしながら、新聞を取ってソファーに座る。いつも通りパラパラと見ていく…。

「あーあ、ダメだ。マジで４コママンガくらいしかおもしろいのがない。することも無いし、どうしよう。」

その時俺は閃いた。新聞には必ずと言っていいほど、折り込みチラシがあるじゃないか！

俺はそれを読んでみることにした。

テキトーに目に付いたものを見ていると、「んん!?」となるようなことが書かれていた。

『これで人生イージーに!ヒーローとして活動しましょう!!』
そうだ、仕事だ。なにか新しいことを始めれば、このクソつまらない毎日とおさらばできる!!
早速俺はチラシに書いてある番号に電話した。
『はい、こちらヒーロー事務所です!どのようなご要件でしょうか?』
「今から行きます!!」
『え（ガチャン』
よし、今から行くことも伝えたし、早速レッツゴーだ。
１０分後
「ここ……だよな」
なんという威圧感の事務所だろうか。
今すぐ帰りたかったが、このチャンスを逃す手はない。
「ごめんくださーい!」
俺は勢いよくドアを開け、入っていった。
「やあやあやあ!!電話くれたのって君で合ってるかな!?」
「え、ああ、はい、そうです、電話しました…」
な、なんなんだこの人。とんでもないテンションで喋ってくる。

それに見た目だってなんか怪しい。売れ残りの帽子みたいなの被ってるし。
「おぉ〜！嬉しいなぁ！僕はツノだおさんって言うんだ！さんまで名前だからね！」
これもまた怪しい…。自分からごめんくださいとか言っておいてなんだけど、
そもそもあのチラシを信じたことが最初から間違ってたかもしれない。
…いやいや。引き下がってはダメだ、オレ。人生変えるんだろ？楽しい余生送るんだろ？
「は、はい。分かりました。で、その…ここで働きくてきました。」
「ここで働くだってぇ!?」
「なんですか…？」
「君、この仕事をわかった上でその発言をしているのかい？この仕事はとってもキケンだ…精神的な意味でも、肉体的な意味でもね。怖いだろう？ここに来た人は今の説明で逃げ帰って行ったよ…。」
「だからどうだって言うんですか？」
ここで俺は少し強気に言ってみた。そろそろこのめんどくさい面接（？）を終わらせたい。
「ほう…。」
その言葉は聞こえにくかったが、確かに俺の耳はこの声をとらえた。耳ないけど。

あと、微妙に口調とか声色も違った気がする…。

「よしよし、君の覚悟はよぉ～くわかったよ!!ここで働くことを正式に許可する!」

こうして俺は新しいだお生の1歩を踏み出したのであった。

だおがたり　1―2「実力と難易度」

とりあえずこのキケンとか言われる仕事には就職することが出来た。
「まったく、あんな脅し文句があるから誰も近寄ってこないって分からないかな…。」
そんなことを言いながら、家に帰った。
家に帰っても就職に成功したという事実に興奮が抑えきれず、頭の中ではずっと、
（ああ、明日からついに仕事が出来る…。最初はミスも多いんだろうけど、すぐに慣れて事務所の一員としてがんばろう…！ああ、ワクワクするなぁ！）
という思いが巡って、８時間しか眠れなかった。
朝６：３０
「あーねむ…」
昨日のやる気はどこへやら、次の日には眠気と共に仕事のやる気までもどこかへすっ飛んでしまった。
これって仕事あるあるなのではなかろうか。
「とりあえず…早く…行かないとな…。」

事務所

「おはようございまーす」

「おっ！もう来てくれたのかい！やる気があるようで関心するよ！」

やる気はない…と言いたいところだがツノだおさんの声のボリュームはとんでもなく、

一気に目が覚めた。これからは目覚ましさんって呼ぼうかな。

「さ、当たり前だけど君には今日から仕事してもらう！まあ1個目はチュートリアルみたいな

感じで、簡単なのからやっていこう！」

「はい、で、内容はなんですか？」

「えーっとね…あ、これこれ。」

そう言いながらツノだおさんは写真を見せてきた。

「この子ね、最近事務所近くでお花摘みとかして遊んでるんだけどさ、ヤンキーとかに絡まれ

ることが多いんだよね。だから今のうちに保護とかをお願いしたい！」

なるほど。てっきり無茶ぶり行ってくるかと思ったら意外と普通だった。でも写真で見る限り

なかなか小さい子みたいだしなぁ…。言葉上手く通じればいいんだけど。
「じゃあ早速いってきまーす！」
「がんばってねー！」
「お、いたいた。いやホントに子供だなぁ…あの純粋さずっと保って成長しないかねぇ…」
保護…とは言え、ここは危ないから別のところに行って遊びなよっていえばいいはず。
「あれ？おにいさんだれー？」
「あーえっとね、ボクくん？ここはちょっと危ないから別のところに言って遊びなよ」
「あぶないってあのメガネかけたひとたちのこと？」
メガネ…？ああ、サングラスか。メガネのヤンキーって結構面白いかも。
「そうそう、その人たちのことだよ。危ないでしょ？」
「ううん、あのひとたちはいつもボクのおはなしきいてくれるし、まいにちアメくれるんだー！」
なっ、なにいいぃ!?嘘だろ、優しすぎんだろ、そいつら。なんでヤンキーの格好してんだ？
ま、まあいい。なんとかしてここから離れさせないと…

「ホントに大丈夫なの？」
「うん」
「ホントのホントに？」
「うん」
　1時間後…
「あっ、おかえり！どうだったー？」
　戻ってみるとツノだおさんがすごい楽しみみたいな顔でこっちを見ていた。
「ダメでした」
「えぇっ!?」
　俺はガラガラになった声を振り絞って説明した。
「あぁ…なるほどね…ごめん、難しすぎたみたいだね…じゃあお詫びとして、ガチャひかせてあげるよ」
「ガチャ？」
　俺は困惑しながらもガチャってみた。中身はツノだおさんみたいなツノしてる、アクマだおってのが
　出てきた。そいつはすぐさまボックスに吸い込まれていった。
「今日はついてない気がする…。」

俺は肩を落としてそう言った。肩ないけど。

だおがたり　1―3「だお竜人　あらわる」

～1ヶ月後～

この1ヶ月間を通して、オレはだいぶこの仕事にも適応することが出来た。

最初のやつを除いてはちゃんと自分の実力にも合った難易度の仕事だったし、戦闘経験もだいぶ積んだ。

そしてオレがちょうど調子に乗っているところに、今日の依頼がやってきた。

「さ、だおくん！今日の仕事だよ！」

といいながらツノだおさんは1枚の紙きれを渡してきた。なに？まさか郵便配達とかかな。

とりあえず紙に書いてある文を読んでみた。えーっと、なになに？

『事務所宛　　とある理由があってだおってヤツが働いてるチームの一員として加入したい。検討よろしく　　だお竜人　』と書いてある。

だお竜人…？誰だろうか。オレは今まで何年もこのだおワールドに住んできたけど、だお竜人なんて名前はこのかた聞いたことがない。ワンチャン罠とかじゃないよな…。

「ツノだおさん、この手紙に書いてる人をチームに加入させればいいんですか？」

「うん、そうだよ！僕は手紙の内容読んでないけど、がんばってね～♪」
だお竜人ってだおがいるところに向かっている最中、思った。ツノだおさんってオレがいない時は
何をしてるんだろうって。どんなタイミングでもオレが事務所に入った瞬間ワープしたみたいに現れるからなぁ。不思議だ。
そんなことを考えている間に到着した。
「おーーーーーーーーーい!!」
どこにいるかパッと見わからなかったので、叫んでみた。
「うるさいぞ」
そう言いながらこっちに歩いてきたのは見知らぬだおだった。
ツノにツバサに左目には痛そうな傷がついている。昔何かあったんかな？
「キミ…だお竜人ってだお？」
「そうだぞ、お前はあの依頼のやつか？」
「うん、そうそれ。で、チーム加入するの？」
「それもあるんだが…。あー…、なんだその…」
「なになに？」
「お前の家に住まわせてはくれないか？」

「家かー、うんまあいいよ」
「マジでか!?」
　まあずっと一人暮らしだったし、家くらいなんてことないでしょう。
「あ、そうそう、チーム加入と言っても君どんくらい強いの？」
「強さ…？」
「レベルとかＨＰのことだよ、ちなみにオレはＨＰ４２００で、レベル７５ね。」
「レベルは…９０で、ＨＰは１１０００だ。」
　えっ、マジで？オレの数倍は強いじゃん。これ仕事始めちゃったら一瞬で上下関係変わっちゃうよ…。
「おおー、普通に強いじゃん、じゃあこれからよろしくねー」
「…よろしく。」
　次の日
「おい。」
「なに？」
「俺の事ちゃんと仕事の上司に紹介頼むぞ。」
「え、いるのそれ？」
「当たり前だろ…。」

こうしてオレは、新しい仲間のだお竜人と共に事務所へ向かっていった。

だおがたり　1―4　「後輩が来た理由」

　オレとだお竜人が2人でテクテクと事務所に向かっている途中、だお竜人が話しかけてきた。
「お前のところのお偉いさんはどんな奴なんだ？」
　どんな奴、か…。ツノだおさんのいい所よりも怪しい部分、つまり悪い所のほうが先に頭をよぎる。とりあえず「えーっと、まあ悪い性格の人じゃないから心配しないでよ」と言っておいた。一応最初以外は自分の実力に合うレベルの仕事を持ってきてくれるし、急に理不尽な言葉が飛んでくる訳でもないし…。オレが言ったことは事実のはず。うん。
「なるほど、性格はよく分かった。じゃあ見た目は…。変なところとかないか？」
　二つ目の質問がだお竜人から飛んできた。しかも今1番聞かれたくない質問をされてしまった。もしここでオレがいいイメージを与えなければだお竜人が帰っちゃうかもしれない！
（俺の家に）「見た目かぁ…。丸い顔してて、手足と体が棒みたいに細い感じかな」
「それはいわゆる棒人間ってやつじゃないか？」

棒…？確かに。ってちょっと待って。きっと今のだお竜人にはただの^ ω^ って顔をした棒人間が浮かんでいるってこと？まずいまずい！せめて地味なイメージだけは取り除かないと！

「あーえっと、あと、あとはね、あれだあの、そう、なんか帽子被っててね、頭にツノが２つ生えてんの」しまった！焦りすぎてろくなことを言えなかった…。

「…ツノ？」だお竜人の方は冷静に聞き返してきた。ここでオレもひとまず落ち着いた。

「うん、帽子突き破って横の辺りにピョコって出てきてるよ」

「なるほどな、つまりお偉いさんは悪い性格じゃなくて、棒人間な体をしていて帽子からツノが２つ出ている…と。」だお竜人は冷静にツノだおさんのことを分析した。なんだか随分と難しいことを考えているような顔をしていた。そんなに悪いイメージを持たせてしまったのだろうか…。

「ＯＫ、最後にひとつ、そのお偉いさんの名前はなんて言うんだ？」

「ツノだおさんだよ。さんまで名前らしいから呼ぶ時は気をつけてね。」

「じゃあなんだ、目下の人はソイツの事をツノだおさんと呼ばなきゃいけないわけか」

「ハハ…。そうかもしれないね」なんて笑っていた時にチラッと事務所が見えた。

「もうすぐ着くね」

「そうだな」
「ねえ、なんでキミはココ、寄りによってオレのいる職場にしたの？」
「そうだな…。確かに最初はここじゃない別の所で活動する気だった。だがな、お前のところの事務所の評判は日に日にうなぎのぼりになって行ってたから、最終的にここになった訳だ」
「なるほどぉ…。なんか照れるな。」なんて言ってるうちに、もう事務所は目の前だった。
「入る前にひとついいか？」
「うん、いいけどどうしたの？」
「お前俺に質問されて返答に迷ってる間ずっと顔真っ赤っかだったぞ（ニヤ）」
「えっ」

だおがたり　1―5　「後輩はチーター」

　早くも弱みを握られてしまったものだが、それよりも今はだお竜人とツノだおさんが気まずい空気にならないかを考えるべきだ。オレらがいつも通りの感じでガチャリとドアを開けると、「はい、待ってましたよ」という顔をして仁王立ち状態のツノだおさんが立っていた。
　たぶんオレら2人とも少し引いた。
「やあやあ、話はわかってるよ、君が例の…」
「だお竜人だ」
「だお竜人くんね、僕はツノだおさん、さんｍ（」
「その辺の話はだおから聞いている。だから必要なことだけを喋ってくれ。」
　…なんだかめんどくさそうにしている。まるで面接してるときの自分を見ているようだった。それからもしばらく質疑応答は続いたけど、だお竜人の返しの9割は「もう聞いている」だった。ツノだおさんがぷるぷるしながら涙目でいたのはちょっと笑いそうになった。
　だが、「だお竜人はこの危険な仕事ができるレベルの戦闘能力を持っているのか」とい

う

　質問で事務所内の空気が少し変わった気がした。確かにだお竜人は見た目こそまあ強そうに見えるけど、実際のことは本人しかわからない。少し間が相手から話は再開した。

「で、結局のところ君は相応の強さはあるの?」

「舐めたこと抜かしやがって。自信があるからここに入りたいって思う訳だろ?」

「ぐっ…。で、でも口だけならどんなことだって言えるじゃないか!」

「おいおい、仕事の面接でこんなウソ言えるはずないだろ」

　だお竜人がそう言うとツノだおさんが台パンしてこう言った。

「ああ分かったよ!そんな大口叩けるんだったらこの事務所をぶっ壊してみなよ!そんな態度を取るってことは、そこまでの自信があるんだろう!?もし壊せなかったら君をこの一員とは絶対認めないからね!」

　この時のツノだおさんはとても怖かった。オレが恐る恐るだお竜人の方を見ると、余裕そうな表情で「いいぜ」と言った。ツノだおさんの長文に対してだお竜人のたった3文字の返答。ずっとこの状況を見ていて思ったのが命の危険だ。なにやってんのツノだおさん。バカなのかな?結局オレたち3人は事務所の外に出て事務所をぶっ壊せるかを試すことになった。ツノだおさんは絶対無理だろうという顔をしているが、だお竜

人は相変わらず余裕の表情を浮かべている。ちなみに連続攻撃はなしらしい。

テスト（？）が始まると、だお竜人は空高く飛んだ。ちょうど事務所の真上あたりでストップ。そこでだお竜人は両腕を空に向けた。ツノだおさんは「きっとあそこから無理ですって言って謝るよ」と聞こえないように煽っている。なんでこんなに仲悪いんだろうなと思っていると、突如だお竜人の頭上に巨大な球体が出現した。バチバチ言っているのでおそらく自分のパワーで出したんだと思う。その球体を見たツノだおさんはだお竜人に向かって必死で首を横に振っていた。イマイチ意味がわからなかったのでオレは逆に（ない）首を縦に振った。それに気づいたであろうだお竜人はオレの方をみてうなずいた。

そして球体は事務所に向かってゆっくりと落ちていった。

次の日、ツノだおさんに改修の請求書が来ていた。

だおがたり　1―6　「有能な後輩（先輩越え）」

なんやかんやあって昨日だお竜人が事務所のあたりにクレーターを作った今日この頃。偉い人であるツノだおさんに改修のための請求書が来ていたが、ありえないほど涙をダバダバ流してプルプル震えている。いくらバカなオレでも何が起こってるかわかる。それほどツノだおさんがすごい顔をしているのだ。だが珍しい、意外と口数が多いツノだおさんがこちらに何一つ説教の言葉がない。

「まあ、壊せって言ったのはツノだおのほうだしな、俺はやれ、と言われたことに素直に従って事務所をぶっ壊したんだ。つまり悪いのはアイツってわけだ。」と、だお竜人がオレに返してきた。まだ何も言ってないのに。

「…てか、それにしてもよくあんな桁違いなパワーを出せたもんだね、さすがだお竜人」

「…桁違いだって？」

「うん、あんな言葉で表せないようなパワーを出せるなんてすごいなぁ、ってさ」

「そう言ってもらえるのは嬉しいんだが、お前やツノだおに見せたのはまだ１００％のパワーなわけじゃないんだよ」と、だお竜人は申し訳なさそうな顔をして言った。

その言葉が聞こえたのか、ツノだおさんはバッとこちらを振り向いた。

「ね…ねぇ…竜人くん…君今なんて言ったんだい…？」ツノだおさんはまるでしわくちゃのおじいちゃんのような顔をして聞いた。ウケる。

「いいぜ、言ってやる。アレはまだまだ俺の１００％のパワーとは程遠いパワーでの攻撃だ」

その言葉を聞いてツノだおさんはおじいちゃんどころかもうかなり危ない状態のおじいちゃんのような顔をして絶望した。マジウケる。

ちょっとこのままではツノだおさんの生命メンタルに関わってしまうので、なんとかしてオレは話題を変えた。

「あ、ねぇだお竜人、ちょっとこっち来て」

「…どうしたよ、内緒話か？」

「面接のことなんだけどさ、だお竜人めんどくさそうにしてた…というか、ツノだおさんの顔見ようとしてなかったような気がするんだけどさ、なんでか理由とかある？」

「ああ、そういうことか…おう、理由ならあるぜ。なんというかな…言ってもほとんどわからないだろうが、俺がツノだおのような顔をどこかで見たことがある気がするんだよ。しかし思い出そうとするとどんどん腹が立ってくる。俺としても急にキレたりするのは嫌だからな、できるだけ見たくなかったんだよ。」

「他人の空似…ってこと？」

「そうだといいんだがな…」
　話もひと段落すんで、ふと後ろを見ると、ぶっ壊れたはずの事務所が綺麗に再建築されている。
　…でも、なんか前の事務所とは違ってなんか…いいイメージは持てないし、ハッキリ言って悪いやつみたいな外観になっている。
「なんだこのダサいデザインは…」オレの声に気がついたのか、だお竜人も事務所を見た。
「…コイツはラッキーなこった…。」
「へ？どゆこと？」
「こっちのことだ、お前は何一つ気にすることは無い、いいな？」
「…う、うん。わかった。」
　なぜかこれまでにない威圧感を感じた。しかも何重にも釘を刺された…。なんか、変だな。

だおがたり　1―7　「グレー企業？」

なんでかわかんないけど事務所がビフォーアフターしてるのには驚いた。
え、いやあれおかしくない？だるまさんがころんだ訳でもないのに。え？
事務所さんがころんだのかな？…一旦この話やめとこ。とりあえず冷静になろう。
ココ最近マジでオレの生活がクレイジーすぎる。唐突に個性が強すぎる同僚は出来るし、
その同僚は面接をめんどくさがってその上司は器具を破壊するくらいの勢いで台パンは
するし、職場はぶち壊されるし、その壊れた職場はありえないスピードで直ってるし…。
一体全体どうなってるのかとない脳みそで考えているとない頭が痛む。すこし考えすぎた。
「イデデデデデ」
「おい大丈夫かよ、ちょっと混乱しすぎたか？」
さすがだお竜人…察し能力えげつない…イケメンに見えてきたかもしんない…。

「そうらしいっすわ…けっこうズキズキする」
「…その調子じゃ仕事できなそうだな、家で休む許可でも取ってきな」
「……うす。」
　これ以上考えたりしすぎたらマジにヤバい…。しかしあの状態のツノだおさんに許可もらえっかなー…。今話題の…あの…ちょちょまる?みたいな顔してるけど…。まあどっちにしろ休むしか選択肢ないしな…。
「あの、ツノだおさん…。」
「あ…で……われ……の……て…た…に……。」
「…ツノだおさーん?」
「し……し…あ……じゃ……。」
「…ツノだおー」
「!!　ぼくはさんまで名前って言ってるだろこの…」
「っ…じゃなくて、えーと、どうしたんだい?だおクン、何か用が?」
「いやちょっとホントに頭痛くて…休んでもいいですか」
「えっ?君にはバリバリ働いてもらわないとけいk……ああ、うん、休んでいいよ!無理しないでおくれ」
「あ、ハイ。ありがとうございます。あとひとついいですかね…」

「なんだい？」
「さっき
「さっき何を言ってたのかは聞かないでおくれ。」
えっ……。どうなってんだこれ。いや質問拒否されただけか…。えーでもなんかいつものツノだおさんと全然違うぞ？あんな独り言今まで言わなかったし、オレでも引くほどオレに対しては怒んなかったし、質問にあんな食ってかかることもなかったのに…。
怒ったことに対しては今までのが溜まってきてたのもありえるけど、怒るならもっとこう
台パンする勢いで怒鳴り散らすはず…。だお竜人の面接のことから察するにだけど。
あっヤベ…考えすぎた。頭イテェ…。
「お、どうだよ許可貰えたか？」
「あ、うん貰えたよ、おそくなってごめんねだお竜人」
「…なんかお前頭痛悪化してないか？」
「それはその…また考え事しててさ」
「お前って普段イノシシみたいな脳してそうなのにな」
「今日は賢いイノシシってわけさ」

「いいから休め、お前相当疲れてんな?」

なんなんだ今日は…。ツノだおさんはいい上司なんだか悪い上司なんだかわかんねぇ。

ここホワイトじゃないのか?ブラック?グレーなのかよ?あーもうわかんない!

こんな状態で考えるもんじゃないな…。明日になったら考えよ。多分無限ループする。

だおがたり　1―8　「ブラックならぬダーク企業」

次の日・・・・・朝5：30・・・・・

「んん～～っっと…」

軽く伸びをしながら目を覚ます。俺を受け入れてくれた家主はまだ夢の中だ。

「…これは俺だけの問題なんだ…」

絶対にこいつを巻き込みたくない。その一心で俺は…俺は…

ヤツを止めてみせる。

外に出ると、まだ周りは薄暗くてモヤがかかっていた。嫌になるくらい周りが静かだ。

足を進めると…見えてきた。ヤツの根城であり…俺たちの職場。

一瞬入るのが怖くなったが、そんなこと感じているヒマじゃない。

ドアノブに手を伸ばした。しかし開かない。ヤツもこの時間帯に来ることは想定されていないのだろう。待つべきか?なんて考えは俺の頭にはなかった。壊すべきだ！

手に力をこめて、打ち出す。ブランクがなくて安心した。

「使ったのはずいぶん久しぶりだったが…。まぁ、手間は省けたな」

意を決して、ヤツの根城へと足を踏み込んだ。慌てた顔をしてヤツ…
ツノだおがやってきた。
「ちょちょっ、早すぎるだろう！こんな時間に来ても仕事も何も無いのに！」
「こんな時間に来たってのに、相変わらず素早いんだな。ツノだお。」
「ツノだおさんまで言わなきゃダメって何度も伝えてるのに…まったく困った部下を持ったなぁ……。」
「そんな困った部下を自分の軍に誘うべきじゃないんじゃないか？」
「軍？誘う？なにを言っているんだい？」
「とぼけるなよ、魔王さま」
「なにかの遊びでもしてるのかい？悪いけど、ごっこに付き合ってるヒマはないんだよ、君んちのだおクンにでも相手してもらいな」
思った以上に口を割らない。どこまでもしらを切るつもりらしいな…。
あの時の疑いが、確信に変わったってのに！こうなったら……。
ちと危険だが、ヤツの本性を暴くにはコレを言うしかない。
「…なぁ、ツノだおさんよ。」
「今度はなんだい、また変なことを言うんじゃないだろうね？」
呆れているような感じのツノだおだが、ひるむわけには行かない。

このまま押し切ってみせる！

「この職場が改修されて、だおが頭痛で早退した日を覚えてるか？」

「あぁ…。うん。つい先日だね。」

「その後お前、足早に職場内に入ってっただろ」

「あぁ、どう変わったのかを見ておかないといけないからね。」

「そのあと俺はどうしてたか知ってるか？」

「知らないけど…外にいただけじゃないのかい？」

「外にはいたさ。職場の外にな。」

「……。」

「で、だ。職場の裏口は確認したのか？ツノだお。ずっとこの職場でやってるんだから、裏口の状態は知ってるだろ。」

「……裏口……。……!!」

「残念なことに、裏口は改修されていない。その上裏口はボロボロで所々穴が空いている…。どういうことかわかるだろ。」

「…内側が……見える……。」

「俺が外でどうしてたか、分かったろ。お前がなにを言ってたかも覚えてる。」

「で、でま、でまかせだ！口ではどうとでも言えるんだ!!」

「ＯＫ、言ってやるよ。よく聞けよ、魔王さま。」
俺はかるく咳払いしてから、ヤツのあの言葉を口にした。

だおがたり　1―9　「だお竜人の賭け」

ヤツのあの言葉…。いや、話と言うべきか。
俺はそれを口に出した。
「よく聞けよ、少し長くなりそうだからな…。『いいか、我が魔王軍の者たちよ。最近、だおくんというのがここに入ってきた。そしてあの、だお竜人もな…。２人ともほぼ私を怪しまずグングンと力をつけている。あのバカだおは気づいていないだろうが、だお竜人は危険だ。良きタイミングであやつらを魔王軍へとご招待してやろうと思っている。各員、いつでも戦える準備をしておくように！』……以上だ。」
コイツがただの言葉で認めるなんて思ってないが、俺は賭けに出たんだ。吉と出るか、凶と出るか…。
時間が止まったみたいな事務所内で、ついにツノだおが口を開いた。
「長話をごくろうさま。口疲れたでしょ、水飲むかい？」
返ってきたのは、まるで感情こもった音読でもした子に返す親のような、俺を相手にしていないような、はじめから何も無かったような、返答。　俺は…間違えたのか？じゃあ、目の前にいるツノだおは、他人の空似だとでも言うのか？信じられない。信じ

たくない。
「……いや、いいよ。ごめんな、変な話して。頭を冷やしてくる…。」
そう言って事務所のドアを開いて帰ろうとしたその一瞬。
俺の真横に禍々しい雰囲気の光線が通った。
「人の親切は受けておいた方がいいんじゃないかな、だお竜人くん?」
「…気持ちはありがたいが、今は1人がいいんだ。ほっといてくれ。」
「いやいや、水飲むくらいでもスッキリすると思うけどなぁ…?」
……俺の賭けはまだ終わっていないようだ。
「そんなに俺のこと家に返したくないのか?」
「いやだから、上司の親切ぐらい受けておいた方がいいって…」
「なんかお前焦ってないか?親切っつっても水ぐらい家にある。」
「……ハァ……。」
ツノだおが大きなため息をすると、さっきの光線が俺めがけて飛んできた。
「部下に随分危ないことするんだな、おい?」
「返したくないに決まってるだろ……。」
「僕の…いや、私の魔王軍を知っていて2度も生かして返すと思うか!?」
そう言うツノだおには、いつもは全く感じられない禍々しい雰囲気があった。つまり

これは…。
「俺の、勝ちみたいだな。魔王さま。」
「黙れ！本来の力も発揮できないヤツに私の計画は止められない！」
「早とちりはよくないぜ？」
「今のお前ごとき、この姿で消してやる」
「そうか、じゃ、がんばってくれ。俺も早く帰ってだおにこのことを伝えにゃならんしな。」
今日の仕事は、少しキツそうだ。

だおがたり　１―１０　「因縁の戦い」

「まさかこんな時にお前と戦うことになるなんてな」
「そんな余裕ができるのも…今だけだ…！」
　そう言うとツノだおは距離をとり、まっすぐ俺めがけて黒い電撃のようなものを飛ばしてきた。
「抜き打ちチェックだ！」
「ぐっ…」
　身体中が軽く痺れを感じるが、これぐらいのダメージは問題ない。俺を見てツノだおは拍手した。
「ほう、相変わらず効かない、と…。」
「お前こそ余裕そうじゃねえか」
　今度はこっちの番だ。拳に力をこめて、一気に近づく。
「オラァッ！」
　拳を思い切り振り下ろすと、鈍い音と共にツノだおが驚いた表情をしているのが見えた。

「は、速い……!?」
「どっかの誰かさんが仕事をくれるおかげでこの姿でもだいぶ慣れたんだよ」
さて、今の一撃だけでもけっこう喰らっただろう。ヤツは今の俺の実力を勘違いしていたため、本気でない。情けない話だが、俺1人でやるなら今が最初で最後のチャンスだ。これで決める!
「次で終わらせてやる……!」
「ちいっ……。」
入口をぶっ壊した時と同じく、いやそれ以上に手に力をこめる。そして……打ち出す!
「くらいやがれ!魔王!!」
巨大な龍のごとき光がツノだおに向かっていく。ヤツの残り体力的にも、俺の体力的にも、これが当たるか当たらないかで勝敗が決まる。だが俺は聞いた。俺の攻撃がヤツに触れる寸前…。ヤツは、口を開いていた。
「バーイ。」
次の瞬間、轟音が鳴り響き、目の前は煙に包まれた。
「……やった……のか?」
ヤツの言葉が、俺を混乱させた。だが禍々しい雰囲気は消えている。どうなった?当

たった？勝った？言葉でも文字でも表せない感情でいながら、結果の確認をするために煙がはれるのを待った。俺の目の前にあったのは…。

大きくヒビの入った壁、俺の攻撃の跡だった。それのみ。

「俺は…！俺は！ついに」

今の気持ちを言葉にしようとしたその時、後ろにさっきの何倍も、何十倍も恐ろしい気配を感じた。この感じ……。ヤツだ！数秒前とは１８０。違う感情を抱きながら振り返ると、いた。いたんだ。姿も、雰囲気も違う、あの…

魔王だおが。

「いやぁ、まずまずの目覚まし攻撃だった。」

「野郎、まだ倒れてなかったのか…!?それに、目覚まし攻撃だと…。俺の攻撃はそんなもんなのかよ!?」

「言っただろう？抜き打ちチェックと。テストぐらいは公平にしないといけないからな。」

「……テツメェ!!」

俺の中で何かが切れた。もうボロボロだとか、攻撃が効かないだとかは頭になかった。イノシシみたいに何も考えず攻撃しにいった。

目の前にヤツの姿はなかった。それに気がつくと同時に声がした。

「…テスト採点の時間だ。」

後ろにいる!そう思った瞬間だった。

「0点。」

それっきり、俺の意識は闇に落ちていった。

だおがたり　1―11　　「もう一回だけ」

……。

どれくらい、経ったのだろう。俺は、死んだのか？
だが息をしている感覚はあるし、足もある。
様々な考えが頭の中を渦巻いている中、俺は重い体を起こすことに成功した。
「……ッ！」
身体中が酷く痛む。少なくとも今はまともに動けないな…。
徐々に冷静になってきた俺は、自分がいる場所が自分の寝室であることに気づいた。
じゃあ今までのは夢だったのだろうか？宿敵に負ける夢なんて縁起が悪いな、と思うと安心感が体を覆うのがわかった。
「冗談じゃないぜ、ホントに……。」
今日は休ませてもらうかと、もう一眠りしようとした。
その時自分の手に何かが握られていることに気づいた。
これは……紙か？

送り主不明の手紙らしきものを読んでみた。
『補習として、もう一回だけチャンスをあげよう。
覚悟ができたら、またおいで。あのバカの目の前で消してあ
全てを読み終わる前に、気づけば俺はそれを破り捨てていた。夢じゃ、なかったのかよ……。
全てを理解してしまった瞬間、俺の視界がぼやけはじめていた。
「俺じゃ…。今の俺一人じゃ、勝てない……。」
目から自分の弱さ、情けなさを証明するものが流れていく。
「俺一人の問題って、決めたのにな……。だおがいなきゃ目の敵一人すら倒せないのかよ、俺は」

「……んー?」
今何時だろ……。眠い目をこすりながら時計を見る。まだ朝6時だ。オレにしては珍しく早起きだなぁ。だお竜人ならもう起きてるんだろうな、まだ眠いけど支度すっか……。めんど……。
「おはよぉーー……。」

まだ早起きになれていないマイボディーを動かしながら部屋を出る。あれ？おかしいな。いつもだったらだお竜人が毎朝のコーヒータイムに突入しているんだけど。まだ部屋にいんのかな？

「だお竜人ー？」

部屋でコーヒータイムしてるかと思ったが、そこには布団の上でうずくまっているだお竜人がいた。

「えっ？あ……え、どうしたの」

予想のはるか79。をいくだお竜人の姿に、朝なのに大きい「えっ」が出てしまった。だお竜人もオレに気がついたみたいで、目が合った。

けっこうな大粒の涙を流している……。

「……だお……。俺、どうすれば……。」

いつもの感じとは程遠い、弱々しい声が聞こえた。これには朝とか関係なく目が覚めた。

「どうすれば…って、一体何があったのさ」

「俺…情けない奴だよ、一人じゃなにもできねえよ……。」

「ちょ、ちょっと、落ち着いてよ。ゆっくり、少しづつ、何があったのか教えて」

今のだお竜人に落ち着くなんて無茶を言っちゃったけど、だお竜人は深呼吸してぽつ

りぽつりと説明をしてくれた。

……正直聞いてる時にわかには信じがたかったけど……。

この涙と声に、嘘はないはず。

竜人のあったことを改めて整理すると、ツノだおさんはずっとオレたち二人を利用していたってことになる。

あんなに優しくしてくれたのも、イロハを教えてくれたのも、全部全部、計画のため。

オレの人生を変えるための転機は、ツノだおさんに潰された…。

ツノだおさん、いや魔王の全てがわかった瞬間、

オレの堪忍袋の緒が切れた。

だおがたり　1―12　「怒りのシャープマーク」

「ふざっけんなああああぁぁぁぁぁ!!!!!!」
オレはキレた。それはもうキレた。だお竜人をボコったのもだけど、それ以上に今までの生活が台無しにされたことに腹が立つ。
「あの野郎許せねぇ!行こう、竜人!オレたちであの魔王だおを打ち倒すんだ!そしてオレたちを敵に回したことを後悔させてやる!!」
今ならいつも以上に強い。なんてったって、オレの心がメラメラと打倒魔王だおを叫び、燃えているから。
だお竜人を見ると、ポカンとした顔をしていたが、すぐにいつもの感じに戻った。
「あー……。その…、なんだ、ありがとよ、だお。怒るのはちとビビったがおかげで涙も引っ込んだ。」
よっしゃ!だお竜人も復活!オレたち二人なら怖いものなし!まだ一緒に住んであんま経ってないけど今はめちゃくちゃ意気投合してる!
「あれ、だお竜人?どうかした?」
テンションが上がっているオレをだお竜人が不思議そうに見ている。

「なんかお前……赤くないか？」
「赤い？確かに今のマイハートは真っ赤に燃えてるけど」
「そうじゃねえ、体が赤くなってないかって事だよ」
　ふと自分の体を見ると体が若干赤色に染まっていることに気づいた。オレは本能でこれが怒りによるものだとわかった。
「さあ、こうしちゃあいられない！早く魔王だおのもとに！」
「ああ、もちろんだ。きっと今もアイツは俺らの職場で首を長くして待ってる」
　気合いを入れやってきた職場の入口。
　ドアの向こうからヤバめの雰囲気が漂っているのがオレでもわかる。呼吸を落ち着かせてノブをひねった。開かない。
「アイツまたドア固めてるのか」
「竜人の時もそうだったの？」
「おう、でもお前ならこんなドアどうとでもなるだろ」
「もちろん、ウォーミングアップがてらブチ破る！」
　口の奥に気持ちを集中させて……。撃つ!!
　これがオレの最近覚えた特技、だおビーム。いい威力だぜイェイ。
「なかなかいい技を持ってたんだな、お前」

「でしょ」
そんな会話をしながら、オレたちは魔王の根城へと足を踏み入れた。
中はなぜか外観からは想像できない広さで、ヤバめの雰囲気がさらに大きくなって、オレたちが知っている職場とはまるで違う。息を潜めながら目を凝らしていると、見覚えのあるツノ、細い手足が見えた。
「覚悟が……できたようだな。」
「今度は１００点満点の戦いでお前をぶっ倒してやる！」
「あのバカもつれてくるとは、愚かな。そんなに消されたいなら……。」
「今ここで死ぬがいい!!」
魔王だおの指先から黒い電撃のようなものがほとばしる。
「その手は食うかよ。だお、避けろ！」
「おわわわわわ」
正直２人の会話に集中してたから危なかった…。ギリセーフ。
「今度はこっちの番だ！」
だお竜人が素早い動きで魔王だおのへと向かっていく。
オレも少し遅れる形で走る。
もう距離を詰めただお竜人は、腕からドラゴンみたいな形をした光を放つ。

「私も、その手は食わないな」
　そう言うと、魔王だおが目の前から消えた。
「え!?消えた!?」
「……ここだぁっ!!」
　だお竜人はなぜか後ろめがけてさっきの攻撃をまた放った。
「何ぃッ!?グハアアッ…!」
　なんとそれが真後ろにいた魔王だおに直撃した!まさか読んでたの!?
「ぐう…。貴様、なぜ私の場所が…。」
「俺がただ真正面しか攻撃できないなんていつ言ったよ」
「復習しているとは、見事だな……。」
「だが!!」
　魔王だおが声を上げると、ものすごい速さで俺に襲いかかってきt……。マズイマズイ!何とかしろオレ!
「このバカはどうかな!?」
「おわっ!うわあああああ!!」
　反射でぶん殴ったが、オレの拳は案の定空を切った。
　やはり前の前に魔王だおはいない…。だお竜人の真似をするしかない!撃つなら今

だ！

「くらえ魔王だお！だおビーム!!」

後ろに向かって思い切り発射したが、手応えはなかった。

まさか……と思い横に目をやる。

「あ……。」

オレ、終わったかも。

だおがたり　1―ＦＩＮＡＬ　「いざ魔王討伐！」

なぜなら、オレの横にいたのは大技を構えている魔王だお
だったんだから……。
「やはりバカの一つ覚えか。くだらん！貴様から先に地獄へ送ってやる!!」
だおビームは高威力広範囲がウリだけど、弱点は発射中はあまり動けないし、撃ち終わったときの隙が長い…。この状態のオレに、避けるなんて選択肢はなかった。
「だお!!!」
だお竜人が駆けつけてくれてるのが声でわかる。助かった！そう思いふと魔王だおを見ると、
笑っていた。
「マヌケめ!!」
魔王だおは急にオレからだお竜人へと方向転換し、溜めていた大技をだお竜人めがけて放った……。
「なんだと!?……負けるかぁぁ!!」
だお竜人、さすがの反応でドラゴン型の光で押し返そうとしている。ぶつかり合った

ふたつの技は相性がいいのか悪いのか、中心で爆発を起こした。
「どうなった……?」
だおビームを撃ち終えたオレも、うかつに動くことは出来ない。できるのは警戒のみ。
だお竜人の目の前には煙が広がっている。すると突如、煙から魔王だおが突っ込んできた。
「あれは囮だ」
「…ッ!?」
オレもだお竜人もコレには反応できず、だお竜人は魔王だおの攻撃をもろにくらってしまった。音からして、絶対普通じゃない…!
「ほらほら、どうした?１００点満点の戦いをするんだろう?」
「クソが…!ガハァッ!」
だお竜人が危ない!そう思う前に、オレは敵めがけて精一杯の攻撃をしていた。
「やめろおおおぉぉーー!!」
「フン!」
オレの攻撃は片腕ひとつで止められてしまった。
嘘でしょ…細さからは想像できない硬さだ…。

「邪魔をするな、ザコが！」
魔王だおは腕を振ってオレをつき飛ばそうとしてくる。
でももうやられっぱなしのオレじゃない!!
「誰が離れるもんか…！」
両腕でガッチリ魔王の腕に捕まる。これでそうそう離れることはない！
そして、この時間稼ぎが魔王だおに隙を与えた。
「クッ、いつまでそうしているつもりだ！」
「……ガラ空きだぞ、おい」
「し、しまっｔ」
「速攻で喰らえ！魔王!!」
ほぼ０距離のだお竜人。オレが掴まっているから良く動けない魔王だお。この状況から導かれる答えは……。
「オラァッ！」
だお竜人の全力の拳だった。その顔面を捉えた一撃は、殴った本人も、喰らった本人も、それを見ていたオレも大ダメージだと満身創痍でも分かった。
今ので終わりじゃない。オレたちのターンは続いているのだ。なんでって、殴られた魔王だおとだお竜人の距離は離れてしまったけど、オレは相変わらず腕にひっついてい

たから。不発に終わったあの技を放つならここだっ！
「今度こそくらえ！怒りの……だおビーム!!」
「何ぃ!?貴様まだいたのか!?」
　あまりの勢いにオレと魔王の距離が離れていく。でも前と違う点は手応えがしっかりあるということ。
「ぐおおおおおぉぉぉぉ……!!」
　ありったけの余力をこのビームに込める。当たった以上、行ける所まで行くしかない！
「……ハァ……ハァ……ウォエ」
　……出し切った。これ以上出すとビームじゃない別のものが出るくらいには。
「だお！大丈夫か!?」
「だお竜人こそ…すごい怪我だよ」
　オレたちはお互いが無事であることに安堵した。
「……ぐぅ……これ…ほど…とはな……。」
　マジ!?まだ終わってないの？
「……私を倒したからと！いい気になるんじゃあないぞ!!貴様ら二人とも……『アイツ』には……勝てないんだからな……。フフ……フハハハハハ……!!」

「……。」

そう言うと魔王だおは倒れ、消えていった。

「……俺たち、勝ったんだな。」

「…あ、そっか！勝った！勝ったよだお竜人！」

大・大・大強敵を倒したオレたち二人。色んな感情が溢れ出てくる。喜び合う中、ひとつの考えが頭を通り過ぎた。

……オレら、またニートになるくね？

だおがたり　２―１　「人生詰む詰む?」

ボロッボロになった体で浮かんでくる最悪のシナリオ。
なんてこったい、ゲームクリアどころかゲームオーバーじゃん!
ニートに逆戻りの上、魔王だおが言ってた「アイツ」にも備えないといけない……。言い出しにくいけど仕方ない…。
「ねえ……、ちょっと思ったんだけどさ」
「なんだ?」
一息ついてゆっくりと伝える。
「オレらさ…。魔王だおというかリーダー?倒しちゃったから……。」
１番大事なところを言う前にだお竜人の顔がみるみる青くなる。
「……あぁー……。マジか?」
「動かす役いないとどうにも……ねぇ。」
一見仕事を入れるのは簡単って思ったけど、どういうルートで入ってきてるのかが分からない。
２人ともＰＣとか使えないし。んーどうすっかな…。

「まあ…。ここにいてもしょうがねえ、明日考えようぜ」
「そうだね」
家に帰ってからも、モヤモヤが止まらなかった。
どう考えても2人っきりで職場を動かすのはキツい。
「だお竜人……。もし働けなくなったらどうするの？」
「そうだな…。どこか別のところで活動するかもな」
「えっ!?」
やべ、オレ特有の突然の大声が出てしまった…。
「働けなくなったらの話だ。それに、正直この家気に入ってるんだぞ」
「そっか…。働き続けられたらいいなあ…。」
まだだお竜人と出会って1ヶ月ちょっとだけど、わりかし仲良くできてると思ってる。強いし、職場にはだお竜人が必要不可欠。
あれこれ考えて目が覚め続けて、
結局6時間しか寝れなかった。

ああ……。来てしまった次の日…。
なんかの間違いで超平和な世界に戻ってないかなぁ。

ないかあ。渋々体を起こし、部屋を出る。
リビングに目をやるといつも通りだお竜人が毎朝のコーヒータイムに突入していた。
変わってなさそうでいいなぁ…。
「おう、起きたか」
「おはよー…。なんかあんまり気にしてなさそうだね」
「そうか?これでもけっこう焦りを感じてるんだ、ほら」
だお竜人が指をさしてコーヒーを見せてくる。
中身はブラックコーヒーだった。
「ちゃんと目ぇ覚まして…現実受け入れないとだろ」
そう言うと竜人はグイッとコーヒーを一気飲みする。
「おおー」
一種のパフォーマンスと頭が思ったのか、自然と声が出ていた。飲み終わった現実直視竜人を見ると、…まあそういう顔をしていた。レアな表情ゲットだぜ!
なんてことを思ってる場合じゃない。
いよいよ職場に向かわなければ…。職場跡地の可能性もあるけどね。
着いた。まず第1フェーズとして、職場はある。存在している。
「ここからが問題だよね」

「さて、どうなるかな」

面接の時以上にドアノブを握るのが怖い。手汗が出ているのを感じながら、ゆっくりと、ドアを、開いた……。

ガチャリという音が聞こえたのと少し遅れて声がする。

「ん、だれか来たみたいだよ」

「あー、あの2人でしょ、たぶん。自己紹介の準備して」

「第一印象大事だから心配だなぁ…」

恐る恐る声の方へ顔を向けると、真っ白な顔と、真っ黒な顔。そして棒のような手足……。

いわゆる棒人間が立っていた。

だおがたり　２―２　「ゆうぼう＆くろすけ」

２人の棒人間が立っている……。それだけだが、少なくとも
オレは安心感に包まれた。オレら以外にいる…！勝ったな。
「ねぇ、これ勝ったんじゃね？」
小声でだお竜人に勝利を共有する。
「棒人間にいい思い出はない……。信用するには早すぎる。」
あら、さすが一筋縄ではいかない男、だお竜人。
気づくと、双方言い出しにくい雰囲気が漂っている。
切り出しができる男、だおくん。行きます。
「えぇーーーっと……。どなたであらせられますか？」
「来たよほら、自己紹介タイム。そっち先やって」
「やだよなんで僕が？第一印象大事って言ったの君でしょ」
いざこざがすごい。ずっと順番で言い争っている。オレも少なからず警戒心が表れたが、白い方が折れたっぽい。
「はぁ……。じゃ、僕から。名前はゆうぼうって言うんだ。ここのリーダーがいなく

なったから来たよ。これでも前いたところでは最前線を務めてたから、よろしくね。」
さ、最前線だと!?ひょろっちい体の割にかなりすごい人っぽい。
「じゃ、次は僕の番だね?」
ゆうぼうの方をみてると、黒い方がぬっと現れた。
「僕の名前はくろすけ!事務・研究・開発担当!戦闘は苦手だけど、その分頭脳は期待していいよ!よろしく!」
「来た理由はなんだ、白い方と一緒か?」
元気だなこの人と思っていると、だお竜人が久しぶりに口を開いた。まだ警戒してんの?猫かな?
「やだなぁもう、そんなに決まってるでしょ?ここには僕の技術が必要不可欠だからだよ」
「…ああ、そうかい。」
悪い人じゃなさそうだけど、ちょっと言葉を選んで欲しい。
「今世界中で使われてるそのスマホだって僕が作ったんだからね」
「はっ?」
突然の情報提供のあまり、だお竜人とハモってしまった。
「マジで言ってるんですか、それ」

あまりにも信じられないので疑い９３％の目でくろすけを見る。くろすけは得意げに答えた。
「マジマジ。調べれば出てくるって」
疑い９６％で調べた結果、疑い０．１％まで下げることとなった。
「あ、そうそう。君らのことは知ってるよ。だおくん、それにだお竜人だね」
「え？あ、はい。正解です」
なんで入って１ヶ月ちょっとで俺らの名前が…。
「実は同業者の間で、『潜んでいた悪を倒した』って話題なんだよ」
「へぇー……そうなんすか」
３人もいる手前、冷めたリアクションをしたが、実際はウハウハだった。この職場最高だぜ。
「ささ、長話もこのくらいでいいだろう。早速なんだけど、仕事がひとつ入ってる。２人なら、やってくれるね？」
話をぶった切ったゆうぼうは、１枚の依頼文をオレらに見せてきた。
「ん？ちっと待ってください。オレとだお竜人だけなんですか？棒人間のお二方は？」
「まずは噂に違わぬ実力があるかを見ないとね」
「うんうん。」

なんでこういう時は息が合うんだこのガリガリ棒人間！

思わずだお竜人に助けを求める。

「なんか…めんどいことになったね……。」

「ニートに逆戻りよりマシだろ、やるぞ」

味方が誰もいない中、嫌々オレは依頼文を覗き込んだ…。

だおがたり　２―３　「ドラゴン大発生中」

えーと、さてさて。いろいろあったけどお仕事を始めるとしましょうか。書いてあった依頼文はこうだった。

『ココ最近、まるで竜のような姿をしただおを沢山目撃しています。彼らのようなタイプは気性が荒いと聞くので、辺りが荒らされないか非常に心配です。もしなんとかしてくれるのなら、この番号に電話をください…。』

ほうほう、なるほど……。「なんとかして」ってのが１番困るけど、そこまで無茶ぶりって感じの依頼じゃなさそう。

「まさか俺以外にもいるのか…、竜族」

同胞がいる嬉しさとそれをなんとかしないといけない悲しみを背負うだお竜人を見て、そういやこの人もか、と再認識した。とりあえず受けるの確定だから、電話すっか。

「えーっと、０、８‥‥」

ポチポチしながら、ひとつの考えが浮かぶ。

「まさかキミが原因とかじゃないでしょうね」

「知らん。これから原因を調べるんだろ」

ぜんぜんオレの勘は当たらないなぁ…。トホホ。しょぼんとしてると、電話がつながった。
「はい、もしもし。」
「あ、どうも。こちら……。」
「もしや依頼を受けてくれる方ですか？ありがとうございます！解決したらまた電話をおねがいしますね」
「えっ、ちょ」
それっきり、相手の声は聞こえなくなってしまった。
……さて、まず何からするべきかな。どこで目撃したか聞き忘れたし。いや聞けなかったのか。
「で、どうすればいいと思う？」
「情報が足りないからな、ひたすら情報収集だろ」
「少なくともオレんちの周りにはいなさそうだけどね」
「おう、だから空でも飛んで色んなところをまわっていく」
「おお、それはすごい！オレは？」
「自分で考えるんだな」
めんどくさそうにそう言っただお竜人は、職場を出たかと思うとすぐさま遠くへ飛び

去ってしまった。これオレいる？
「……うーん……。」
　することが思いつかず頭の中だけがずっと動いている。
「行動しなきゃ意味無いでしょ～」
　くろすけが椅子に座ってグルグル回っている。煽られてる？
　思わず怒りのだおくんにチェンジしかけたが、ゆうぼうのフォローが入る。
「まあまあ、悪口を言ってるわけじゃないんだ。情報収集はだお竜人が引き受けてる。ならだおくん、君がすべきことはそれが終わったあとの仕事だよ」
「情報収集のあと？」
「そう、きっと次はだお竜人が集めた情報を元に目的地へと乗り込むことになる。乗り込んだら、何が始まるかって話さ」
「気性が荒いヤツらなんですから…。戦闘？」
　そこでやっとオレはやるべきことを理解した。
「ウォーミングアップでもしときますね」
　ゆうぼうは満足そうにうなずいている。
　情報収集を頑張っているだお竜人の次は、オレが先頭で頑張る番だ！

「よくあんなこと言えたね、ゆうぼう」
「君がからかわなければよかったんだよ、まったく」
「ごめんごめん。でもホントにやることないのにやることを見つけさせるトーク力はすごいと思うよ」
「最前線を務めてただけあるでしょ？」
…なーんて会話が棒人間の間で交わされてたのは、ウォーミングアップに夢中で気づかないオレだった。

だおがたり　２―４　「竜なのかロボットなのか」

どれぐらい素振りとイメトレをしてただろうか。
けっこういいトレーニングになってる気がするよ、これ。
疲れを癒すため好物のメロンジュースを飲んで回復していると、スマホから着信音が流れ出した。
お、だお竜人だ。なんか見っけたのかな？
「もしもし、どしたの」
「それがな、今でかい山の前にいるんだが」
「でかい山？名前わかんないの？」
「居候を頼んだ俺が周りを知ってるとでも言いたいのか」
「お口が悪くってよ、竜人」
「ここで電話切ってもいいんだぞ」
「ご要件をお願いします」
「その山に大穴を発見した。大勢入れる広さと構造をしてる」
「そこが怪しいと踏んだわけね」

「怪しいも何も、見張りがいるからな。…竜の。」
「え、じゃあ確定じゃん！すぐ向かう！」
だお竜人の返事を聞く前に電話をブチ切ったオレは、すぐさまその場へと向か……えない。場所がわからん！
「すいませーん！この辺のでかい山ってなんかありますー？」
「えー？でかい山ー？そうだなぁ……竜角山？」
りゅうかくざん……？初めて聞いたよそんなとこ。ってか名前が，まんま，すぎるでしょ、どうなってんの？まぁいいか、行こ。
地図アプリの偉大さを噛みしめながら、竜角山に到着した。
だお竜人が物陰でこっちこっちと指示している。
「オッケー！」
「おいバカ声出すんじゃねえ！」
あ……。そういや見張りいるんだった……。やべ。
「ム、誰カ、イルナ！」
案の定というか当然というか、大穴の見張りに見つかってしまった。やるしかない！
そう思ったが、見張りは襲ってこなかった。
「相手情報ヲスキャン……。竜族ノ存在ヲ確認シマシタ。」

「なんだこの人、襲ってこないよ」
「まあ見るからにロボットって感じだしな、ポンコツみたいな見た目だが」
　確かにだお竜人が言うそれは、ツノやツバサは似てるけど鉄っぽい感じだし、足から出るジェット噴射で浮いている。オマケに左目がプラスのネジになってる。
「じゃあこの人は同族じゃないの？」
「ああ、誰が作ったかは知らないが、竜族っぽいロボだ。」
　ほー。わざわざ竜っぽいのを作るなんて、今回の件と紛らわしくて困っちゃうな……。そう思っていると、再びロボットが口を開いた。
「コンニチハ、ヨウコソ竜族ノヒトリ。ワタクシＤＯ―ＤＲトモウシマス。」
「……おう。」
　あ、オレは無視される感じなんだ、へー。悲しい。
「ワレワレ、『竜の団』ハ、アナタヲ歓迎シマス」
「竜の団？なんだそりゃ」
「……説明ガインプットサレテイマセン。実際ニ確認スルノガ最善ト判断シマス」
「どうやら、この先に入れるのは俺だけのようだな」
「え……、オレ、ウォーミングアップして来たのに」
「なにかあったらまた着信入れてやるから。それまで待ってろ」

ちぇーー。なんだよ今回。オレの不遇っぷりがすごいよ？

「そうだ。おい、だお。この依頼って別に竜族を倒す必要はないんだよな？」

珍しい。このチームで１番戦闘狂なだお竜人が戦闘に関して確認をするなんて…。やっぱ同族は傷つけたくないよね。

「うん、少なくとも人が多すぎない所に行かせる感じ。」

「そうか、わかった。」

そう言うと、だお竜人はＤＯ―ＤＲと共に大穴の中へと消えていった。……さーて、暇になっちゃった。体力温存したいし、音ゲーでもやって待ってよ。

だおがたり　２―５　「勧誘失敗」

一応依頼は順調に進んでるんだけど、暇だなー。

暇を叩き潰すにはやっぱ音ゲーに限るわ。周り誰もいないし音量大きくしてやろ。タンタカタンタンってね。

……だお竜人が大穴に入って６、７分はたっただろう。まだ連絡がないのを心配しつつ、オレは初見フルコン目指して指を動かしまくっていた。このままクリアしてやるぜ！

曲も終盤、意識を１００％それに向けていたが、突如画面上に電話マークが現れた…。なんで今なのねえーーー！初見！フルコン！したかったのにぃー！許せん！だお竜…。いや、ナントカ団！

スマホの着信が鳴り響く中、オレも竜角山の大穴に突っ込んだ。中は下りの階段がある。この下に竜族の方々がいるわけね。

「おんどりゃあ！助太刀すっぞだお竜人！」

広場のような所に出ると、見覚えのあるようなロボットが合計５体いた。量産型かな？と思ったけどツノの本数、形とかが違う。変なとこで個性発揮してるんだな…。

「来たか、だお」
「なんてタイミングで連絡してんの？こっち音ゲーしてたんだけど」
「それは１０割お前が悪いだろ、逆になんで音ゲーしてたんだよ」
「暇だったから！」
　この恨みはこのロボットどもにぶつけてやる……！構えをとると、一斉にロボットどもがオレを見てくる。
「スキャン中……スキャン中……竜族デハ無イコトヲ確認。」
「「「「排除ヲ開始スル」」」」
　うわっ、ハモった。キミら仲良いねー。
「だお竜人、オレロボットと戦うの初めてなんだけど」
「俺もだよ」
　相手の出方をとりあえず伺っていると、ご自慢のジェット噴射で辺りを自由に飛び始めた。煙いし何よりどこ見ればいいかわかんない！
　その中の１人がまっすぐ目の前に体当たりを仕掛けてくる。
　まあまあ早いけど正面ならぶん殴ってカウンター……。
「いっっって!!」
　敵のボディに振りかぶった拳をお見舞いしたはずが、ロボット特有の鋼鉄の体には効

果がなかった。
しかも体当たりを止められてない！また痛いのは嫌だー！
思わず顔を手で覆うと、目の前がまばゆい光に包まれた。
なんだなんだ？と思うとだお竜人の攻撃が炸裂していた。
「お前も似たような技、持ってるだろ」
あ、そうだわ。オレにはだおビームがいる！いや、ある！
仲間がやられたのを見て、残りの４体が襲ってくる。
「ずいぶん脳がないプログラムされてるっぽいな」
「予算ないんでしょ、きっと」
オレのだおビームとだお竜人の竜人波が広場を支配する。
そしてロボット５体とも、動かなくなった。
「…まだ故障程度ですんでるな、無駄に頑丈だ」
だお竜人が１体を持ち上げ、確認している。なんか気になることでもあんのかな？
「それ、なんかするつもり？」
「コイツ機械だろ？だからちょっと改造して俺たちのいいように使いたいと思ってな」
そう笑みを浮かべるだお竜人に、ちょっと恐怖を感じたのは言うまでもない。

だおがたり　2―6　「使えるものはなんだって」

地味に思いロボット…ＤＯ―ＤＲだっけ？をズルズル引きずって職場まで戻る。にしてもなんで持ち帰るだなんて考えに至ったんだろう…。
「よく誰かのロボットを持ち帰るなんて真似ができるね」
「戦ってる時思ったんだよ、ほら、あの黒いヤツは頭がいいらしいからな。口だけじゃないことを証明してもらいたい」
「とことん警戒するね、まだ信用しないの？」
「仕方ねーだろ、前も言ったが棒人間にはいい思い出がない」
そうとう魔王だおのことがトラウマになってるんだなあ……。
「あ、ちなみになんで襲われてたの？悪口でも言った？」
「ちげーよ、いろいろ竜の団について説明を受けて…まあ８割聞き流したが。最終的に勧誘されたが、断ったら豹変したんだよ」
「宗教じゃん？」
「ヤツらはとにかく竜族を集めるのが目的らしい、その後何がしたいのかは聞いてなかった」

「それけっこう致命的なミスでは…？」
「お前は心底興味無い話を最後までちゃんと聞けるのかよ」
「申し訳ねえ」
　こう見るとだお竜人ってホント自由だなぁ…。悩みとかなさそう。
　そんなこんなで話していると、職場に着いた。引きずりすぎてＤＯ―ＤＲが前よりボロボロになっちゃったけどね。
「ただいま戻りました」
「戻ったぞ」
　戻っていきなりゆうぼうが席を立つ。
「え、もう終わったのかい!?」
「いや、お前の相方に用がある」
「僕？」
　くろすけがボロボロのＤＯ―ＤＲを見て小さくため息をはく。
「なるほど、修理？それとも解析？」
「話が早くて助かるぜ。てっきり自分の力で頑張れとでも言うかと思ったが。こいつの持ってる情報が欲しい」
「ちょっとくろすけ…！」

約束と違う、という顔でくろすけとだお竜人を交互に見つめるゆうぼう。
「どうやら君からの信用を得ないといけないらしいからね…。地下室、借りるよ」
そう言うとくろすけはＤＯ―ＤＲを持ち上げ、地下室へと降りていった。
「…で、竜角山でなにか掴めたんだね？」
あ、オレはなーんも知らないんでだお竜人、お願ーい。って目で合図を送る。
「竜角山に大穴を見つけたんで軽く調査をして来た。まず今黒いのに渡したロボット。合計５体いた。あとはどこかと繋がっていそうなＰＣもあったが、攻撃で壊れちまったよ」
「…大きな手がかりは、くろすけに頼むしかなさそうだね」
「どんぐらいで終わるんだ？さすがに何週間も待つのはゴメンだぞ」
「そろそろじゃない？」
「「は？」」
まだだお竜人とハモって声が出た。今そろそろって言ったよね？ガチならくろすけ様って呼ぶはめになるんだけど。
噂をすればなんとやら、地下室から声がする。
＼　終わったよーー　／
「ほらね」

「おたくの所の技術はすごいもんだな」
若干の不信を抱きながら地下室へと降りる。
そこには椅子の高さを変えて遊ぶくろすけと、大量のケーブルに繋がれたＤＯ―ＤＲがいた。
「いやぁ、なかなか面白い情報が手に入ったよ」
「…自称するだけあるじゃねえか」
「舐めてもらっちゃ困るね、僕のすごさを本で出してもいいんだよ」
あたりの空気がエベレスト級に寒くなる。
「……ゴホン、では解析情報をご覧あれ」
そばにあるＰＣには、大量の文字列が並べられていた。

だおがたり　2―7　「ここにはいない敵ども」

視力が落ちそうなくらいビッシリと文字が並んでいる。
とんでもない数の情報が詰まってたんだな…。
「たくさんあるように見えるかもしれないけど、故障のせいでいくつか正確に抜き取れないデータがあったよ」
「いや、悪い悪い。5対2だから手加減が難しいんだよ、な?」
だお竜人から圧力を感じる。とりあえず頷なかければやられるッ!
「で、なんかいい情報はあったのか?」
「僕が見てもわかんないし、君らで確認してね〜」
正直どれを見ればいいかわかんないけど、1個1個確認すっか…。オレ地味な活躍しかしてないよ今回…。
「これで俺の聞き流したこと以上に何かわかるといいな」
そもそも聞き流さなければ問題なかったのでは、なんて言うのは野暮なことなのは知っている。
ＰＣを見ると、それはまあ多種多様な情報の嵐。

食事に好きな物、材質やら作られた日。特にシステムや構造を見る時はめまいがした。

「これ……意味あんのかな…。」

「頑張れ、いっしかアタリが出るはずだ」

画面をスクロールしていく間は、意識の半分は情報に目を向け、もう半分は早く一番下についてほしいという祈りを捧げていた。ほぼ地獄のような時間だったが、ちゃんと有益な情報をゲッツすることはできた。

いい感じの情報はだお竜人にメモを任せたので、完璧なはず。

「よっしゃ、これで全部…。ガチ疲れた…。だお竜人、説明よろしく」

「任せろ。１つ目、組織の名は『竜の団』。２つ目、目的は竜族を集め、世界の覇権を握ること。３つ目、ボスの名は暗黒だお。姿は不明。４つ目、これが大事だ。幹部がいて、そいつらは現在ではなく未来世界で計画を進めている。」

なるほどね…。未来かぁ……。ん？今未来っつった!?

「未来ってどういうこと!?」

「俺が分かるかよ、読み上げただけだぞ」

どう未来に行ったのかは知らないけど、ホントの話なら今なにやっても無意味になっちゃう……。

「僕をお忘れかな」
チッチッチって感じでウザイ動きをするくろすけ。
まさか……まさかね……。
「僕はそいつのありとあらゆるデータを手に入れたんだよ？その未来の行き方とやらも大体わかってる」
「でも、1部データが欠損してるんだろ？そんなんじゃキツイんじゃないのか」
「素材さえ分かってれば後はフィーリングさ。君らは上でお茶でも飲んで待ってて」
「……天才もここまでくると罪だな」
上に戻る際、だお竜人が小声で言っていたのはヒミツ。
「メロンジュースって美味いのか？俺メロン嫌いなんだよな」
「そっちこそ、苦いコーヒーをよく美味しく飲めるね」
回復&他愛もない話で時間を潰すこと2時間。
またもや地下室から声が聞こえる。
＼　ぅおっしゃあああ！　／
「終わったな」
「終わったね」
さてさて、一体何が待ち受けているのやら……。

本日２度目の地下室には、明らかに違和感のある渦が浮いていた。これにはさすがのだお竜人も息を呑んだ。

「フゥ、おまたせー。ワープホール式タイムマシン、完成したよ」

くろすけの技術に顎が外れそうだけど、何よりも恐ろしいことがただ１つ。それは…。

この奇妙な渦に入らなければならないということ。

だおがたり　2―8　「1歩先の世界に」

グルグルと回っている渦を見ていると今にも吸い込まれそう。なにか機械に繋がってるわけでもないし、本当に独立して浮いている。
「これで本当に未来へいけるの？正直、怪しいよ…。」
「大丈夫、仕組みを説明するとね、その中に入ると体がとんでもない速さで加速するんだよ。だいたい秒速３００ｍぐらい？」
「死ぬじゃん？」
え、なに急にそんなハイリスク装置作ってんの？ココ最近でいちばん怖いわこのワープ。いやまあワープ初めてだけど。
「死なない死なない、加速し始めると意識がついていけなくなるし、体感的には５秒ぐらいだから。」
「なるほどな…。だお、世界最強のジェットコースターと思えばいけるぞ」
ちっくしょう、多数決め。２対１で「入れ」という圧をかけんのやめてよ。まずオレジェットコースター乗ったことないし。
だがオレも男だ！入るしかない！でも先発はだお竜人でお願いしまーす。

「ちょっと楽しみだぜ」
だお竜人がいつになく楽しそうにワープの前に立つ。
よく得体の知れない物体を前に楽しそうにできるななんて思っていると、いつの間にかだお竜人の左腕がオレを掴んでいるのに気づいた。いや、気づいてしまった。
「えっちょ、ちょちょっと待って待って！1、２の3でお願い！ねえ聞いてるねえ！」
「はいイチニーサン。」
１秒で3カウントを終えただお竜人はワープへと飛び込む。そして道連れにされるオレ。
「あああああああああああああああ……」
「うおああああああああああああああ……！」
さすがに叫びしか出てこない。喉の限界が先だったか意識の限界が先だったか、気づけば地に足をついていた。
「うぉえぇ……地獄の瞬間だったわ…」
酔いまでついてくるなんてなんて欠陥品だろうか…。だが未来へ行けると言う利点で欠点が全て消される。おかしい…。
「思ってたよりは……ハードだったな……。」
２人とも精神的ダメージを負ったが、とりあえず本当に未来に着いたっぽい。あたり

は大して変わってないけど、なんか、こう……。クリアパーツが多いというか…。うん、キレイ！

「未来って言っても1日後でも未来扱いだよね？まさか来た年を間違えたとかない？」

「合ってるだろ。やたら竜族とか竜っぽいロボット多いし。竜の団が支配成功した世界のようだな」

じゃあもし未来世界に気づかなかったらこの世界が実現してたわけかぁ…。恐ろしい限りだよまったく。

「どうやって竜の団の幹部を見つけるつもり？」

「簡単な話だ、お前は竜族じゃないしそれっぽい見た目もしてない。あっちから勝手に来るはずだ」

「なるほど。じゃ、ブラブラしてればいいのね」

オレたちはしばらく未来を堪能することにした。いろんな店をまわったけど、竜族か竜ロボしかいなかった。いちいち怪しい目で見られたけど、だお竜人が先頭に立ってくれたおかげで大事にならずに済んだ。

それでも３６０。を隠すのは無理なわけで、一気に人が集まってきて囲まれてしまった。

「おいこいつ竜族か？」「ツノもツバサもないぞ」「珍しいタイプかなぁ？」あっちこっち

から声がする。どうすべきか頭を悩ませていると、人ごみをかき分けて入ってくる竜族がいた。

「ちょっといいかな。おれは竜の団の『幹部』を務めている者だ。話を聞かせてくれないか」

だおがたり　2―9　「戦うしか能がない族」

か、かかか、幹部？幹部っつったよね？昆布じゃないよね？
なんかよくわかんないけど、これで目的を達成できるかも…。
幹部登場に静まり返る野次馬ども。この世界だと相当偉いんだな、あのうるささが０になったよ。
「こんなところで話すのもなんだから、移動しようか」
「あぁ、はい。お願いします」
返事をするなり幹部さんは、オレを掴んでその場を飛び去って行った。後を追う形でだお竜人も飛ぶ。
「おい、どこに行くつもりだ」
「すぐそこさ」
競争的な感じで飛んでいると、いつしか人気のない場所に到着していた。そこには鬼のような姿の竜族と、ＤＯ―ＤＲ。また見た事ない姿だ。これで合計６体だよ。多くね？
「さぁ……てと。」

場所が変わったからか、さっきまであった温厚な感じがなくなった気がする。
「知ってるかな、竜の団。名を言うならば、おれは幹部のファイターだお。右にいるのはオニだお。左は…一応幹部のＤＯ―ＤＲ　マークＸ。」
「あー…はい。自己紹介どうも?」
「じゃ、そっちの君も自己紹介してもらえるかな」
ファイターだおの視線がだお竜人をロックオン。
「…だお竜人だ。」
「相変わらず冷たいもんだね。次、なんもない君。」
なんもない君ってオレ!?初対面の割にひどいなこの人。
「だおくんって言います、だおって呼んでくださ…」
最後まで言い切る前に、鋭い爪が目の前に迫ってくる。
「おわっ!?」
反射で避けたけど、それでも爪はオレの右頬をカスった。
「おお、命中しなかった。慣れてるね」
「テメェ…最初からそのつもりだったな」
だお竜人の声が怒りで震えている気がする。
「ここは竜族、そしてＤＯ―ＤＲのみ存在していい竜の楽園。それ以外は壁のシミにで

もなってもらうのが掟なんだよ」
「そして……。そいつの味方をするなら君も同罪だ」
「痛がってる場合じゃないぞ、だお。来る」
「わかってるさ…。このぐらい平気」
数分前まであった空気はどこへやら、穏便に済ませられないことが確定してしまった。
「ＧＯ。」
ファイターだおの合図とともに、仲間の幹部も襲いかかってきた。鬼の方は棍棒が痛そうだし、ＤＯ―ＤＲに至っては何してくるかわからない。
割かし本気で行かないとマズイ…。怒りモードＯＮ！
「オラァっ！行くぜこの野郎――！」
手始めにガラクタをぶっ壊す。鋼鉄ボディには打撃が効かないことは学習済み。ここはアレで倒す！
「怒りの…だおビーム!!」
「ナ、ナニィィィ!?」
辺りを整地させる威力を持っただおビームは、ＤＯ―ＤＲに致命傷を与える。このままの勢いで数的有利を作りたい！

「勝テルト思ウナ！弱点サーチ起動！」
煙が上がるＤＯ―ＤＲのネジ部分から光が放たれる。別にダメージはないが、きっとここからが…キツい。
眩しさに一瞬攻撃の手が緩む。流石ロボット、その数フレームを見逃さない。
「隙ヲ見セタナ、『光』ガ貴様ノ弱点ダッ！」
敵の腕からファイターだおのような爪が生えてくる。
「クロスエックスラッシュ!!」
噛みそうな技名と共に無数の連撃が目の前を覆う。ガードには間に合ったけど、１発が地味に重いから時間の問題だ…。
だおビームを撃とうとしても、もうお腹には何も残っていない。どこだ…どこをぶん殴れば大丈夫なんだ…？
自分のＨＰと引替えに有効打を探し出す。しかし探すのに気が入りすぎてガードがお留守になっているのに気づけなかった。
「あ、ヤベ……。」
「バカメ、コレデ終ワリダッ!!」
最後の一撃を叩き込もうと腕を大きく振りかぶるＤＯ―ＤＲ。
確かにＨＰはもうキツい…。でも、今やっと。

鬱憤を拳に込める時が来た。

「そこだあぁぁぁぁっ!!!!」

だおがたり　２―１０　「同族狩り」

当たれば勝ち確、外せば負け確。
こっちの腕もタダじゃ済まないレベルで放った拳。
「うおりゃああああぁぁぁっ!!!」
……オレの拳は、ヤツのネジ部分をめり込んでいた。
「オレの、……勝ちだ。」
「ガ…ガガ……」
きっと内部の大事なとこが壊れたんだろう、ＤＯ―ＤＲは小爆発を起こし正真正銘のガラクタになってしまった。
「あー、もうしばらくロボットと戦いたくない…」
さてこっちは片付いた。だお竜人…大丈夫かな?オレが突っ走ったせいで２対１の不利な感じだけど。でも見た感じ結構優勢っぽい。オレは疲れたし右腕痛いし参戦はムリ…。
「くそっ、コイツ１人の癖に隙が少ないぞ!」
「ただ戦ってるわけじゃないんだよ」

だお竜人は避けては一撃を入れ、避けては一撃を入れる。
格ゲーなら友達がいなくなる戦い方だけど、今はそんなこと言ってられない。せめてオレが回復するまで耐えて…！
「そら」
だお竜人がお得意の竜人波を放つ。だおビーム並の広範囲の前には、避けるすべはなかった。
「な、なんだそr」
かませみたいなセリフを言いながら竜人波を喰らうファイターだお。幹部なだけあり、ダメージが蓄積していたにも関わらずまだ立っている。
「おれはそろそろマズい…。オニ……。頼むぞ」
「……。」
さっきからオニだおは全く喋らずチャンスを狙うばかり。
竜族って戦闘センス高いのかもしれない。
「うおおおっ！負けるかぁあ！」
鋭い爪を光らせながらだお竜人に攻撃を仕掛けるファイターだお。今まで以上に単調な攻撃に、だお竜人は軽く呆れているような顔をした。
「もういい……。ご苦労さん」

避けるどころか、だお竜人は敵の懐に潜り込む。
そして猛烈なラッシュが入るわ入るわ。連続で聞こえてくる殴る音には耳を塞ぎたくなった。
トドメの一撃を叩き込まれたファイターだおは、壁によりかかって倒れた。
「終わったぞ」
一仕事終えた感じでだお竜人と久しぶりに顔を合わせる。
「え、でもまだ」
言い切る前に背後から今まで隠れていたオニだおの棍棒がだお竜人の頭めがけて振り下ろされる。
「だお竜人！危ｎ…」
オレが警告すると同時にだお竜人はオニだおの顔面に裏拳を喰らわせていた。
「気づいてたの…？」
「俺達は魔王を倒したんだぞ。こんなヤツらに負けちゃダメだ」
確かに魔王レベルの敵ではなかった。とりあえず勝ったはいいけど、このまま帰ってもしょうがない。どうしよう。
敵は全員倒れてるし…。ん？いやちょっと待って。
「ぐ、ぅ……。」

まだ倒れてない！ファイターだおはまだやられていなかった。弱々しく歩くファイターだおは、小さく口を開いた。
「暗黒だお様……。お願いします……。」
そう言うと、ファイターだおの目の前に紫のワープホール式が現れた。
「だお竜人！なんか、なんか出た！」
「落ち着け。今がチャンスだ、アレに入るぞ」
「え」
またあの地獄を見る必要があるってことかぁ……。
腹をくくらずして、未来は救えないって言いたいんだね、だお竜人。そんなに言うならやるしかないね、うん。
「どけどけどけぇーーー！」
ワープめがけてダッシュする。ファイターだおが立ち塞がっているが、ボロボロの体は壁にならなかった。
「じゃ、お前のボスぶっ倒しておくぜ」
「ボスのもとにレッツゴー」
「……。」
なんやかんやあったけど、やっと元凶にたどりつけそう。

さぁ待ってろよ暗黒だおとやら、絶対に負けない！

……って意識が飛ぶ２秒前まで考えてました。

だおがたり　2―11　「竜を束ねる暗黒」

ボスのところにつながっていそうなワープに入ってから10秒くらい。猛烈な気持ち悪さを感じながら、オレたちはついにボスである暗黒だお?のもとにやってきた。

あたりを見渡しても……何も無い。ただただ広い地面が続いている。こんな所がアジトなの?

「だお竜人、これワープ先合ってる…?」

「さあな、だがまずは目の前をよく確認すべきだ」

誰もいなかったはずの目の前には、黒いモヤが存在していた。目を凝らして見ると、だおっぽい姿が映る。というか…オレと瓜二つな感じ!?

「やあやあ。会えて嬉しいよ、だおくんに、だお竜人。」

そのモヤ…いや、暗黒だおが口を開く。もう既にオレらのことは筒抜けのようだ。

「お前が…暗黒だおだな?」

「その通り。竜の団の頂点に立つのがこの、オレさ。」

ん……?ちっと待てよ。この声どっかで聞いたな……。

たしか、電話…。電話で聞いた声……?

「あなたもしや…依頼人？」
「ああ、そうさ。魔王だおの仇…とらせてもらおう。」
　そのために竜の団を…!?なんて奴だ！
「じゃ……始めようか？」
　暗黒だおが１歩踏み出すと、足元から同じようなモヤが溢れ出す。まあまあ綺麗な景色だったのに周りは黒色で埋め尽くされた。モヤと暗黒だおが同化して全く位置が掴めない。
「こ、ここだぁっ！」
　勘で放つ拳はもちろん当たらない。だお竜人は相手の行動を待っている。きっとカウンターするつもりだろう。
「はぁっ！」
　暗黒だおの声と共に、２つの光線が手から発射される。
　後ろを取られたせいで２人とももろにくらってしまった。
「いってっ！」
「ぐはっ」
「あと…何発持つかな…？」
　どうしよう……。自分から攻撃してもまず当たらないし、カウンターしようとしても

近づいてこないからできない…！

まずはあのモヤをなくさないと…

「だお、お前ならコレをなんとかできんだろ」

黙ってただお竜人がやっと口を開く。なんとかするっつったって…。あぁ、アレか。オレの十八番。

「超絶モヤ晴らしだおビーム！」

自分の片足を軸にして３６０。にだおビームを撃つ。だお竜人は飛んでいるので当たらない。みるみるうちに黒いモヤは消えていく。

全範囲を元に戻したところで、暗黒だおの姿をとらえることが出来た。

「さすが、ここまで来ただけはあるな」

「ここからはオレたちのターンだ！」

気合いの１発を叩き込もうと暗黒だおに向かっていく。

「舐めるな」

右から暗黒だおの蹴りが飛んでくる。腕で抑えたが、ヤツにはまだ手が残っている…！ヤバイ、動けない…。

「喰らえ。」

目の前が真っ黒になるレベルの闇がオレを襲う。

「まだまだこれからだぞ」
　一瞬で距離を詰められる。危機感を感じるのに、体は言うことを聞かない。
「待ちやがれ！」
　だお竜人の声が響く。また任せっきりになる自分が情けないなぁ…。
「おぉ、怖い怖い」
「テメェ、俺の仲間を集めて世界征服なんてさせねぇぞ！」
「それはあくまで建前だ。お前らを倒したらすぐ、竜族なんて消すつもり。」
「……絶対許さねぇ」
　だお竜人と暗黒だおの肉弾戦が続く。でもおかしい、あんな強いだお竜人が押し負けている…！まるで全てを読んでいるかのよう。
（ハァ…ハァ…くそっ、コイツ、速い…）
「自分が強いと思って慢心するなよ、だお竜人！今のお前なんぞその辺の……ザコと同じなんだよっ!!」
「ぐあぁぁぁっ！」
　だお竜人ですら暗黒だおに対抗できない…。
　残されたのは、オレ、だけかな。少し与えられた時間で考えた１個の策でなんとかできるか不安だな……。

いつもの怒りの…リミッター解除！

「おいっ！暗黒だお！」

「そういやもう１人いたっけ」

「今度は負けない…！怒りのだおのさらに上……」

「怒りのだおＶ２のチカラ！見せてやる!!」

だおがたり　２―ＦＩＮＡＬ　「真紅のシャープマーク」

「うおおおおぉぉぉ……！」
自分のチカラを制御できる限り解き放つ。
怒りの心を大きく燃やして、戦う姿。
それがオレ、怒りのだおＶ２だ!!
「ほう……。まだ余力があったとはな……。」
「いくぞっ！オレはアンタを色々許さない!!」
オレが戦えると分かると、暗黒だおは闇の玉を作り出し、大量に飛ばしてきた。でももうその手は食わない。
だおビームのエネルギーを噛み砕いて、いくつも飛ばす。
「だおビームならぬ…だおブラスト！」
オレの攻撃と暗黒だおの攻撃が相殺し合う。お互い無防備な状態だ。
「俺にできることっ！肉弾戦に肉弾戦だぁーっ！」
とにかく近づいて、とにかくラッシュをかける。

「芸がないな、怒りの力とやらは」
暗黒だおは慣れた動きで避けるが、これはそこまで重要じゃない。メインはこの攻撃だ！
「……む……!?」
「超・怒りの…だおビーム!!」
顎が外れるくらいに口を開き、エネルギーを２００％全力で発射する。
「ぐうううう…!!」
暗黒だおも闇を放って対抗してくるが、どんどんだおビームと暗黒だおの距離は縮まっていく。
「おりゃあああああ！」
「ぐあああああ……」
またまた全てを出し切った。でも前の時とは違うところが１つある。
それは、敵がまだ倒れていないこと。
仰向けに倒れた暗黒だおがムクリと体を起こす。
「予想外だ…。ここまでとは。さすがだおくんとやら、ただものでは無いな」
「そっちこそ、まだ立ってるなんて」
「仮にも、ボスだからな……。弱いヤツについて行っても、何もいいことは無いなんて、

誰でも知っている。」

そう言うと、暗黒だおの顔がだお竜人の方を向く。その瞬間、俺の怒りは加速した。

「だお竜人は…！だお竜人は、弱くなんかない!!強くて、頼りになる、オレの大事な仲間だ！」

オレの声と発するオーラは、周りの空気を震わせた。それと同時に暗黒だおの顔に焦りが見える。

「チィッ、単純なヤツめ…。そろそろ本気でやらないと、耳が痛くなりそうだ」

一瞬の静寂が訪れると、暗黒だおの闇の力が膨れ上がっていく。阻止しようにも、だおビームはもう出ないし、もちろんだおブラストだって出るわけがない。

なにかできることを探していると、背後から見覚えのある大きな光が放たれた。そしてそれは、暗黒だおの不意をつくには十分な速さだった。

「なにいっ…!?グハァッ！」

お互いに状況が飲み込めず黙っていると、攻撃が放たれた方から声が聞こえた。

「俺を……。勝手、に……。殺すなよ……。」

「だお竜人！」

まだギリギリだお竜人に意識はあった。正直ウルっときそうになったけど、今はそんな場合じゃない。

「暗黒だお。……ケリをつけよう。」
オレが暗黒だおに近づくと、暗黒だおは笑みを浮かべた。
『ケリをつけよう』……?ふざけたことを抜かすなよ、この友情ごっこめ!オレはこんなところでやられる訳には行かないんだよ!次は、最初から全力で捻り潰してやる……。」
暗黒だおは足元に攻撃を放ち、煙幕を作り出した。
煙幕が晴れると、…案の定、暗黒だおは消えていた。
「…ひとまず、事務所に帰らないと。だお竜人、立てる?」
「当たり前だろ。俺はまだまだ死ねん。」
オレたちがお互いに安否を確認していると、突然携帯が鳴り出した。くろすけから電話が来ている。
「もしもし、どうしました?」
「つ、繋がった…!2人とも、今どこにいるんだい!?繋がらないから心配したんだからね」
「あーー……。ボスと戦ってて気づきませんでした」
「ボス!?これはよく話を聞く必要がありそうだね…。待ってて、すぐ探し出してワープを足元に送るから!」

「今なんて言いまｓ」
今日何度目かのワープをしている中、だお竜人の顔がいつもより曇っていることに気づいた。
「俺は…俺はもっと強く……」
なにかブツブツ言っていたが、よく聞こえなかった。
そんなモヤモヤの記憶を最後に、意識は遠のいていった。

だおがたり　3―1　「否定される努力」

くろすけが見つけ出してくれたおかげでなんとか事務所に戻れたオレたち。吐き出されたかのようにワープを抜けると、「お待ちしてました」オーラを放つゆうぼうとくろすけの姿があった。高身長だからちょっと怖い。

「いやぁ、ずいぶんとボロボロになって帰ってきたね…」

「でも、帰ってこれたってことはやっぱりキミ達いい実力の持ち主なんだって事が証明されたよ」

うんうん、全力で頑張った後のお褒めは当然だよね。

「じゃ、あっちで何があったか聞かせてよ、お土産として」

「……オレら、旅行してきたわけじゃないんですけど」

傷を治療してもらいながら、オレたちは未来、そして暗黒だおとの戦いについて話した。特に、暗黒だおが依頼主だった話はびっくり仰天してた。椅子から転げ落ちてくろすけが怪我しそうになってたのは秘密。

「まだ就職して1年も経ってないんでしょ?その割には高いレベルの仕事をこなしたね。…厳密には依頼詐欺だけど」

「でも、2人すごく頑張ったっぽいよ、くろすけ。何かいい特典でもつけてあげようよ」
「うーん……。特典ねぇ……。」
おおっ、これは期待できそう。思わず目が輝いちゃうね。
「そうだ！」
雷が落ちたのごとくくろすけが手を叩く。
「ボクらの上下関係を無くすってのはどうかな」
「「はっ？」」
4分の3が反対の意志を一言で表す。なんでこういうところは賢くないんだこの人は……。
「え、だってそうすればこれから先スムーズに行くかなと……思ったんだけど。」
「……お前なあ……。」
呆れただお竜人が疲れも込めた大きなため息を吐く。
「そういや、だお竜人ってあんま自分からしゃべんないよね」
「俺がしゃべらないと言うより、俺の周りがしゃべりすぎなんだよ」
「えぇー？なんかいろいろ考えてるんでしょ、そっちは」
「お前自分でなんも考えてないって言ってるようなもんだぞ」
なんかだお竜人って、魔王だおを倒してからやたらと考えてるような顔することが多

いんだよね。悩みでもあんのかな？

でもあの自由なだお竜人が悩みぃ？

「……暗黒だおは、まだ倒しきれていない。今度は、今度こそは……絶対に勝つ。」

「まさか怒りの力をさらに解放してもダメだったからなー、正直不安だよ」

一通り話もすんで、傷の痛みも引いてきた。

ゆうぼうから「特典とは言わないけど、本当によく頑張ったから3日間ぐらい休みあげるよ」と言われた。

その間は棒人間コンビは忙しくなりそうだけど、せっかく頂いたお休みだし、存分にぐうたらしようと思いまーす。

家に帰るなり、だお竜人がいつもより真剣な顔でこう聞いてきた。

「その……悪かったな、あまり役に立てなくて。俺…そんなに、強くないのかも……しれないな」

だお竜人が弱音を吐くなんて珍しすぎるので、ぐうたらする気もどこかに飛んでいってしまった。

「そんなことないよ、まさか暗黒だおに言われたことを真に受けてるの？」

「気にしないようにはしてたんだが……。これでも俺、努力してきた方なんだ、才能じゃないんだよ」

だお竜人の拳が強く強く握られている。
「その努力を痛みで否定されるのは……。けっこう、辛い。」
「…だお竜人…。」
「俺は、もっと強くならないといけない。お前の怒りに匹敵する、いやそれを超えるレベルにはな。」
そう決意したように言うだお竜人は、背中を見せる。
「……夕飯までには、帰ってくる」
「え、あ……うん。」
玄関の扉が閉まる音が、家中に響き渡った気がした。

だおがたり　3―2　「苦悩の竜人」

たいした言葉もかけられずだお竜人を送り出してから３５分くらい。テキトーに豚汁でも作る準備をしていると、思わず飛び上がってしまいそうな轟音がオレの耳を貫いた。

耳ないけどね。何作ろうとしてたか忘れちゃったよ。

「びっっっ……くりしたぁ……。」

寿命が３０秒ぐらい縮んだ気がした。まぁまぁ、うん。聞かなかったことにして。夕飯の準備を続けよう。

「まだだ……！まだ足りねぇ…！」

だおの家を出てから３５分は経っただろうか？

俺はひたすらに己のチカラを磨いていた。俺は弱くあっちゃいけない。俺の左目がこうであるうちは。

あの出来事から何十年が過ぎたことか…。真の力を封じられたのは俺の左目が傷つけられてしまったからだ。たとえ目が元に戻ったとしても、何があっても、アイツ

……。

魔王だおだけは。許してはいけなかったんだ。

暗黒だろうがなんだろうが、魔王に関係あるなら全て倒す。

そう、思っているのに。何故だろうか……。

体が震えている。恐怖、しているっているのか…？

「くっ……くそおぉぉおおおっ!!」

恐怖する自分を無理やり押さえつけ、辺りに技を放ちまくった。気づいた時には更地の上に俺は立っていた。

「はぁっ……はぁ……。」

正直、俺はそのへんのヤツらの数倍は努力している自信があった。周りが強いなら、埋めればいい。壁があるなら、越えればいい。

その一心で俺は上り詰めてきた。

そのうち、……『才能』という言葉が嫌いになった。

そんなものを持っているなら、努力なんか必要ない、と言っているように思えたから。

「……帰るか…。」

暗くなり始めている空に、なぜか親近感を覚えた。

「帰ったぞー…」
聞き覚えのある声に喜びを感じるオレ。…ってちょっと！
「だ、だだだ、だお竜人？なんかボロボロじゃない？誰かと戦ってきたの？」
「いや、軽く修行をしてきた」
「軽いとかいうレベルじゃないでしょその感じは」
「人の心配より腹の心配してくれ、今にも腹が悲鳴をあげそうだ」
「オッケー！そう言うと思ったからね……」
フフフッ、ついに見せる時が来たか、オレのちょっと得意料理！さあご覧あれ！
「……これは……」
「そう、カップラーメンです。」
あれ、なんか反応良くないな。なんで？カップラーメン嫌いな人っているの？
「あ、ちゃんと時間は測ってるから」
「そうじゃな……まぁ、いいか。」
ため息をつきながら、だお竜人は辛い方のラーメンを選び、食べ始めた。箸割るの失敗したけどね。
次の瞬間、だお竜人の眉間がすごいことに。あらあら。
「か、カラッ……!?おい、なんか入れただろっ！」

「気づいたー？トウガラシを混ぜてみました」
うんうん、辛さでだお竜人のネガティブを吹き飛ばす作戦は大成功のようだ。
んー、でも気のせいかな……？
なんか左目がちょっと動いてたような気がする。
いやぁ、まさか、まさかね……。

だおがたり　3―3　「暗黒ｖｅｒ．２．０」

だお竜人が修行を始めてから数日がたった。
あれからちょくちょくイタズラで辛いラーメンを出すけど、前に見た気がする左目が少し動く現象は起きていない。
うーん、絶対になんかのカギになると思うんだけどなぁ。
オレが得たのはだお竜人の面白いリアクションだけか……。
きっと休暇が終わった今もだお竜人は修行してるんだろう。
じゃ、オレはちょっと昼寝でもしてるかな……。

俺が修行を始めてから数日。
あのクソ辛いラーメンを食べてからなんだか調子がいいように思える。もちろん好きなものだったからモチベが上がったとかではないはず。攻撃の出も早くなったし、一撃はより重くなっている。
俺の左目がまた開く日もそう遠くないかもしれない、と小さな希望が生まれた。
「また……あの姿になれるのか…俺は……。」

ふと空を見上げる。
「……ん？」
なにか黒いものが猛スピードでこちらに向かってくる。
「うおぉっ、あ、危ねぇッ！」
野球選手のスライディングのように落ちてきた，それ，を避ける。落ち着いて見てみると…かなり見覚えのある姿をしていた。
「やぁ。久しぶり…ってほどでもないかな？」
「…ホントに来たのかよ、逃げたと思ったのにな」
俺が挨拶すると、暗黒だおは小さく舌打ちをして答えた。
「言っただろ、お前らは魔王だおの仇だと。……それに、オレだって本気を出したいんだよ」
「本気、か……。」
正直恐怖しているが、まだ勝ち筋はあった。
それはここ数日で得た修行の成果をいかんなく発揮すること。
空中戦に持ち込めば分がある。そう思ったのもつかの間…。
ヤツの姿が前と変わっていることに気がついた。
気がついてしまった、という方が正しいか。

手から生える鋭い三本の爪、大きく広がる翼。
その変わった姿はまるで……。竜族そのもの。
「お、お前！一体何をした!?」
「気づいた？実は…えーっ……と。竜の団？だっけ。そこの奴らからチカラを上手いこと拝借したんだ。そいつらが今生きてるかは知らないけど。」
「…お前は、俺たちを…竜族を一体なんだと思ってんだよ!!」
感情を抑えきれず叫ぶ。暗黒だおは表情を変えることなく俺の問いに即答した。
「無駄に力のあるゴミ。」
この言葉を最後に俺はじっとするのを我慢できなかった。
「許さねえぇっ!!」
怒った人物が真っ先に取る行動、殴打。
とにかくこの畜生をぶん殴ってやりたかった。
「ヒュー、怒らない怒らない。もしかして彼のマネしてる？似てるね」
まるで息をするように連打を避け、煽りを入れてくる。
だが…もう1発も当たらないほど、俺は怠けていない！
ドゴォッ
「……グ!!」

俺の右ストレートが、ヤツの左頬を突き刺した。
「どうだよ、力のあるゴミの攻撃は」
暗黒だおが少しよろけながら距離を取ってくる。
「…この数日でここまで腕を上げるとは……。舐めた態度で悪かった、謝るよ…。」
俺の与えたダメージは決して少なくないはず。
それなのに奴は余裕の態度を崩さない。
なんだ、この違和感は……？
「と、言うわけで……」
「ちゃんと本気で戦おうかな。」

だおがたり　3―4　「弱さに打ち勝つ時」

暗黒だおのその発言後、あたりの空気が一変した。
「さて…この新しい力…。うーん、そうだな……。1度オレを追い詰めた彼に尊敬の念を込めて、暗黒だおV2と言おうか。」
「ずいぶん余裕そうだな…。」
「真剣な戦いほど、落ち着きが大切なんだよ」
奴がゆっくりと1歩を踏み出す。その瞬間足元から黒い霧が出現し、あたりの景色を1色に支配した。
「前見たアレか…。もう俺には通用しねえぞ」
ジャンプと同時に羽ばたき、霧ゾーンから抜け出した。
「やはり飛んだなだお竜人!･それは囮だっ!･」
なんと同じ空中にいたのは暗黒だお。
薄々思ってはいたが、飾りではなく本当に飛べるらしい…。
「今度はオレが攻撃させてもらうぞ!･」
「チィッ…!･」

両腕を振りかぶり、そこから繰り出される爪の連打。
なんとか防御の体制を摂ることに成功したが、防御込でも奴の攻撃はそう甘くなかった。
猫のひっかき、なんて可愛らしいものではなく新品のナイフが同時に肌を切り刻むような痛みが続く。
「フフ…。ガードが最適解と判断したか、だが逆にソイツがお前の命取りよ！」
フィニッシュに蹴りを入れられ、地面へと叩き落とされる。
「ぐ……う……。」
硬い地面にぶつかったことよりも、腕の痛みが何倍も大きい。自分の両腕は早くも限界を迎えそうだった。
「ま…負けるかよ、まだまだこれからだ」
「……やるね」
一番得意の接近戦ですら不利になる……。
なんとか打開策を見つけねばならない。
「はぁぁぁぁぁ……!!」
両手の間にエネルギーをこれまで以上に集中させる。
そう…。特大の竜人波を発射するのだ。

「……お得意のアレが来るようだな…？」
このエネルギーの大きさには流石の暗黒だおも警戒心を示している。この攻撃で…俺の運命は変わるだろう。
吉と出るか凶と出るか、今わかる。
「喰らいやがれぇぇーーーッ!!」
今まで放っていたものより数倍以上の大きさで放つ。
放った俺が飛ばされてしまいそうだ……。
「…お、大きい…!!…だが、負けんぞ!」
なにかがぶつかった感覚がする。恐らく奴の方もデカい攻撃をぶつけてきたのだろう。
「うおぉぉぉぉぉッ…!!」
「はぁぁぁぁぁぁーーッ!!」
少しずつ攻撃の距離が暗黒だおの方へと近づいていく。
「ぐ…ぐぐ……!」
そのとき、一瞬目の前が光ったかと思うと…、
互いの攻撃の中心で爆発が起こった。相殺だ。
爆破により空にも地面にも煙が広がっていく。

俺は…

俺は、コレをずっと待っていたんだ。

足にグッとチカラを込めて暗黒だおがいる方向へと飛んでいく。煙を囮にするのは…お前だけじゃない。

俺にはもう、殴るような力も残っていない。

あるのは半分以下のエネルギーと……。

必殺技。

「今だ……！喰らい尽くせ！『竜の牙』!!」

目の前に指で円を描く。そこから現れたのは、誰もが飲み込まれてしまいそうな大きさの口と牙をを持つ、竜。

ソイツは煙の中を突破し、大きな口を開けて奴の目の前に飛び出す。

「……な……な……！」

リアクションをさせる暇もなく、竜は暗黒だおにガブリと言う音を立てる。

「ぐわぁあああっ!!喰うな！オレを喰うなぁ!!」

「……出してやれ」

開放される暗黒だお。無抵抗のまま地面に落ちてきた。

確認すると、もう爪も翼もなくなっていた。

「……まさか…あんな技を隠していたとは……。認めよう、だお竜人……。お前は、強くなった……と……。」

「……。」

暗黒だおは、倒れたまま動かなくなった。

だおがたり　３―５　「己を高める理由」

「……ふぅっ……。」

これで…俺の未練、全てが終わった。俺はもう、弱くない。

体はもう歩くのもやっとなほど辛いがなんとか家に戻れるほどの体力はありそうだ。帰るまでに……意識が……持てばいい…がな…。

「……んぐごっ！今何時!?」

やべー、ちょっと寝すぎたかもしんない。急いで時計を見ると、寝る前から２時間たっていた。思わず頭を抱えてしまう。

「ええ～マジかよ…ちょっと寝るつもりがさぁ～もぉ～…」

気づけばもう晩御飯を作らないといけない時間。俺の自由時間が消え去っちゃったよ…。萎えている気持ちの中、家のドアを開ける音が聞こえた。それと同時に…何かが倒れる音。

「えっ、なになに!?」

大急ぎで階段を下り、玄関に向かう。そこにいたのは……。

「だっ、だお竜人!?」

うつ伏せに倒れているだお竜人。ビビってでかい声をあげたのに反応がない。…つまりだいぶマズイ状況！しかも結構血が出てるし、両腕なんか真っ赤っかになってる！
「…これは早くしないとマズイ！」
だお竜人を担ぎあげ、すぐさま部屋のベッドに運ぶ。
こういう時助かる、応急処置セット。ネットで得た知識でなんとか止血ができた。
……ちょっと包帯巻きすぎたけど。
「よ…よし。あとは様子見でいこう……。」
静かな時間がどれだけ続いただろうか……？
また眠くなっちゃったよ。絶対6時間はたってる。
「……ん……。んん……。」
「あっ！起きる!?起きて!!」
「……うるせ……」
子供みたいに毛布ごとそっぽをむくだお竜人。
「うるせじゃないの!!起きて！寝ぼけてないで起きなさいよ!!はよ！」
「だからうるせぇっ……て……？あれ、俺どうしてたんだ…？」
「お～、起きた。血だらけで倒れてたんだよ、特に腕の出血がひどかった」
だお竜人は少し考えるような顔をすると、まとまったような顔をしてこっちを見た。

「あぁ…。俺、もたなかったか……。迷惑かけてすまんな」
「大丈夫大丈夫。それよりそっちが心配だよ。記憶とかちゃんと残ってる？驚くぐらい血出てたよ、ほんとに」
「その辺は問題ない……。少し休めばまたすぐ動けるさ」
　……オレにはわかる。だお竜人は無理している。本当に「少し」だけ休んでまた修行に行く気なんだと、オレのだお・アイは示している。
　前々から思っていたこと…。聞くなら今しかないだろう。
「だお竜人……。いっこ、聞いてもいい？」
「なんだ？」
「なんで……なんで、そんなに強くなりたいの？」
　一瞬の沈黙を経て、だお竜人が答える。
「そうだな……。半分は、まず俺の真の力を取り戻したいから。もう半分は……。お前を倒すため、だな。」
「え……？」
　ビビった。今、本当に一瞬、だお竜人から敵意を感じた。
「別に、お前に恨みがあるわけじゃない。ただな……。」
　すると急にだお竜人が話の途中で腕を振ってきた。

「うおぁっ」
　完全に不意打ちだったが、避けた。危ないなぁもう。
「やっぱりな。俺、割と本気で当てに行ったんだぞ」
「ど、どうして突然そんなことするの！」
「前からお前の戦いぶりを見て思ったんだよ。素人の動きじゃない、ってな」
　素人の動きじゃない……？オレ、まだ就職して1年もたってないし、ああいうガチな戦いは仕事を始めてからだから素人のはずなんだけど。
「わかってないのか？自分で。要するにだ、お前はな…。」
「戦闘の才能に溢れすぎているってことだよ」